

山形県南陽市

稻荷森古墳

—史跡整備に係る昭和63年度発掘調査報告書—

1989年3月

南陽市教育委員会

山形県南陽市

いな り もり こ ふん
稻 荷 森 古 墳

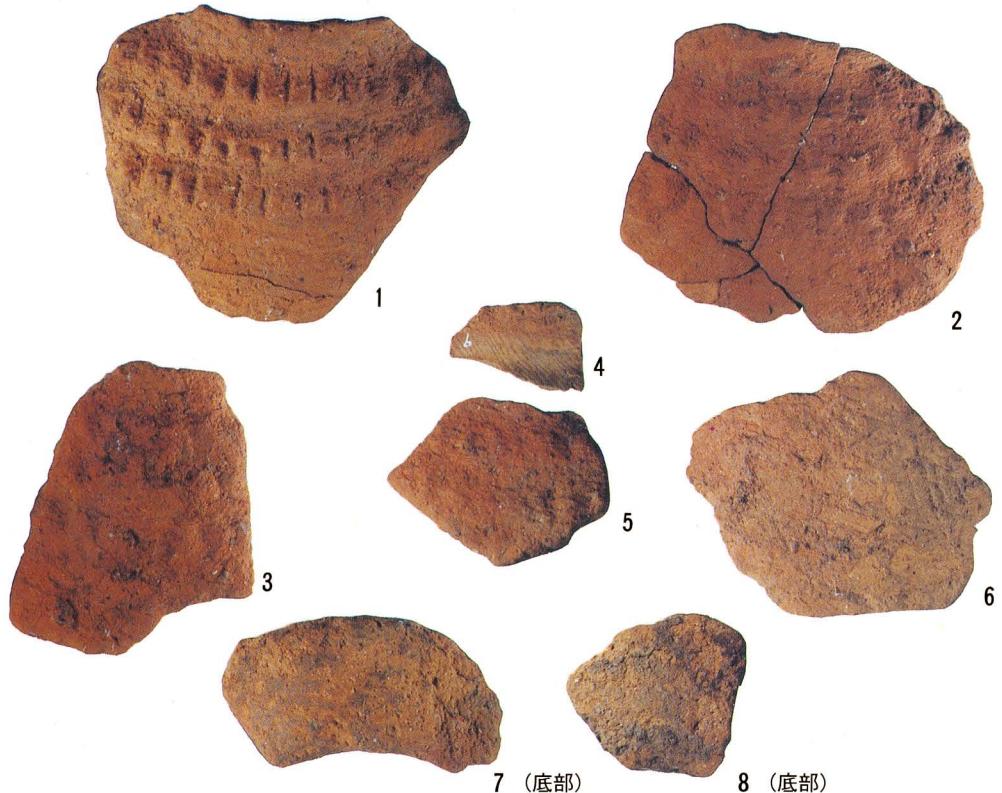
——史跡整備に係る昭和63年度発掘調査報告書——

平成元年3月

南陽市教育委員会



1. 稲荷森古墳全景（南東から）



2. 稲荷森古墳後円部D区出土土器（縮尺約1/2）



1. 稲荷森古墳前方部 I 区（昭和54年度 Z S 区）北壁土層



2. 稲荷森古墳後円部昭和62年度 4-1 区（昭和53年度 第4 トレンチ）東壁土層

序

南陽市には、指定文化財だけでも国指定史跡の本古墳をはじめ、県指定16件、市指定61件という数にのぼっています。その中に置賜地方の稻作農業の営みを示す「石包丁」や、古墳からの出土とみられる「瑪瑙製勾玉」等があり、さらに特徴的なものとして山形県内で最も古い「正元元年大日板碑」や、有銘では県下最大4.2メートルの偉容を誇る「文和三年阿弥陀板碑」等15基もあり、その造形的な美しさと共に堂々たる威風は当時の信仰の深さを物語るものであり、本市の歴史の中でも極めて特徴的な時代を象徴するものとして貴重なものです。

また、市街地周辺の山麓に多くの古墳群が確認されていますが、そのうちいくつかの古墳が県および市指定となっています。

これらの文化財の保存と活用は当市の大きな課題の一つになっていますが、東北第6位、県内最大規模をもつ本古墳の整備はとくに第一義的な課題であり、昭和62年度から準備としての発掘調査をすすめてきたところであります。二年度にわたるこの調査によって、整備に必要な多くの基礎資料を収集できましたことを大きな喜びと考えています。

今日、社会情勢の変化の中で、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」の方向に価値観が移行しているといわれ、観光の文化志向が強まる中で東北地方の歴史探訪という視点で考えた場合、この整備事業がとくに大きな意義をもつものであり、その成果に期待しているところであります。

2年間の調査にあたって市の文化財保護審議会委員の皆様は勿論のこと、特にご懇切な指導をいただいた明治大学教授大塚初重先生、山形県立博物館主任学芸員加藤 稔先生、宮城県多賀城跡調査研究所研究員丹羽 茂先生、日本考古学協会々員佐藤鎮雄先生、山形県文化課埋蔵文化財係長佐藤庄一先生、それに自然地理学的観点から有意義なご指導をいただいた山形大学助教授阿子島 功先生、ならびに調査と精緻な図面作成等に鋭意ご努力賜わった日本考古学協会々員茨木光裕先生には深甚なる感謝を申しあげます。また地元保存会の方々並びに調査参加者各位に衷心よりお礼を申しあげ、ごあいさつといたします。

平成元年3月31日

南陽市教育委員会

教育長 渋谷 幸一

序

山形県南陽市に存在する前方後円墳・稻荷森古墳は国指定史跡となっている著名な古墳である。墳丘の全長が96mという山形県下最大の古墳というだけではなく、均整のとれた典型的な前期形式の墳形を有する点でも、まことに注目すべき古墳というべきである。

東日本における前方後円墳の分布が、どのような歴史的な意義を有するかは、考古学や古代史の研究上、いまさかんに議論がおこなわれているところである。古墳文化発現の地域と衆目の一致する近畿地方から見れば、山形県は関東よりさらに遠く、僻遠の地とする考え方は考古学界でも常識であった。古墳文化の中央から地方への伝播が事実とすれば、東北地方での古墳出現の時期は、近畿より約一世紀近くも遅滞するという推測がこれまでの常識的見解なのであった。

南陽市の稻荷森古墳の存在に注目された山形県内の考古学研究者は、まことに正統的な研究段階を積みかねられ、この前方後円墳の科学的な究明を果たすことに大きな努力を傾けられた。1977年（昭和52）の山形県史編さん室の墳丘測量調査に続いて、1978年・79年（昭和53・54）の両年にわたって、山形県立博物館は稻荷森古墳の周辺および墳丘に対する試掘調査を実施された。当時、前方部の未発達な稻荷森古墳の測量図を見る機会があり、あまりに形式的に古い墳丘形態と、山形県の古墳であるという点で驚いたものである。それほどに稻荷森古墳の存在は、東国の古墳文化の理解の上で、また日本全体における古墳文化の展開の上で、きわめて重大な考古学上の問題点をもつものであった。

稻荷森古墳後円部の墳丘裾部近くから最初の調査で、土師器の高杯形土器が出土している。この土器の型式上の特色は、東北地方の古式土師器の範疇に属していることが次第に明らかとなり、本古墳の築造が少なくともこの土師器の年代に接近した時期になることが予測されるにいたった。国史跡の指定後は、稻荷森古墳の保存整備問題が当然うかび上がってくる。南陽市当局は市民からの要望もあり、本古墳の保存と活用に向けて指導委員会を設置して、本格的な対応に入った。1987・88年（昭和62・63）に整備に向けての確認調査が実施され、文化庁記念物課当局と山形県教育委員会との援助と指導を受けつつ、ここに調査を終了することができた。この関係当局の指導と援助に対し、関係の委員として深甚な謝意を表するとともに、南陽市市長をはじめ教育委員会教育長ほか関係の各位のご努力に対しても、深く敬意を表する次第である。

いまや山形県のみならず、全国的に経済機構の改変やら開発が相つき、貴重な文化遺産で姿を永遠に消すものが多い。稻荷森古墳は、今後わが国の諸状況がたとえ如何に変化したとしても、南陽市における古代人のメッセージを伝える物証であることは間違いないことである。もし未来において日本が誤った道を辿るようなことがあったとしても、稻荷森古墳だけは私たちの行動を静かに

見守っているに違いない。稻荷森古墳が保存されていれば、少なくとも私たちはそこを原点として考え直すことができる。これからは稻荷森古墳の調査結果にもとづいて、墳丘を整備し後世に伝えのこすことが現代に生きる私たちの任務であろうと思う。

平成元年 3月

稻荷森古墳調査指導委員

大 塚 初 重（明治大学教授）

例　　言

1. 本書は、国指定史跡「稻荷森古墳」の整備事業にあたり、国庫補助を受けて南陽市教育委員会が実施した、「昭和63年度発掘調査」の報告書である。

2. 発掘調査期間 昭和63年8月1日から同年11月22日まで。

3. 調査体制

調査主体 南陽市教育委員会

調査担当 南陽市教育委員会社会教育課

課長 渡部昌久 文化係係長菅野章

次長 熊坂善行 主事大道寺祝子

学芸員吉野一郎

調査指導 山形県教育庁文化課

稻荷森古墳調査指導委員（5名）

調査担当者 吉野一郎（南陽市教育委員会学芸員）

茨木光裕（稻荷森古墳発掘調査員・日本考古学协会会员）

4. 稲荷森古墳調査指導委員の構成

大塚初重（明治大学教授）

加藤稔（山形県立博物館主任学芸員）

丹羽茂（宮城県多賀城跡調査研究所研究員）

阿子島功（山形大学助教授）

佐藤鎮雄（南陽市文化財保護審議委員・南陽市立宮内中学校教諭）

5. 調査協力 調査に関し、つぎの方々や機関等からご協力をいただいた。記して感謝申しあげたい。とくに、D区出土土器に関しては、明治大学考古学博物館熊野正也先生はじめ多くの方々からご教示を賜った。

山形県立博物館 山形県立赤湯園芸高等学校 南陽市長岡地区 稲荷森古墳保存会

川崎利夫 保角里志 熊野正也 池崎譲二 井澤洋一

根木修 渡邊昌宏 千田剛道 斎藤基生 佐野五十三

宮下健司 寺崎裕助 上野純司 白井久美子 栗田則久

萩原恭一 藤崎芳樹 金子真土 芳賀英一 高松俊雄

佐々木和博 小田野哲憲 原川雄二 児玉準 田中哲郎

結城慎一

6. 化学的保存処理 D区から出土した底部穿孔土師器は、風化が著しく脆弱なため、遺物強化保存処理専門技術者武田昭子先生に処理を依頼した。また、I区南壁の土層断面剥ぎ取り調査指導を、山形県教育庁文化課（担当長橋至技師）に依頼した。ご協力に深く感謝申しあげたい。

7. 今次調査では、古墳の形態分析に係る墳麓の遺構は、将来の調査に備えて、完掘せず部分的に保存し、また、他の遺構も必要な所のみ掘り下げ、できるだけ保存につとめた。

8. 作業参加者

発掘作業	鈴木 茂蔵	渡部 正二	相沢 一雄	古山 嘉吉	寺嶋 六郎
	茂出木 博	加藤 英一	篠崎淳一郎	沼沢 涌初	鈴木ハナ子
	鈴木シゲ子	平林 正志	(順不同)		
整理作業	牧野 尚美	高橋 孝子			

9. 本報告書の凡例

① 本書には、昭和63年度の調査を中心とし、部分的に昭和62年度以前の調査結果も記載した。昭和62年度調査概報と異なる部分については、本書により補正したものである。

② 図中の方位は、真北をさす。

③ 本古墳の標高は、南陽市長岡所在の一等水準点(214.7664m)から導いたものである。

④ 本書で使用した遺構の分類記号は、つぎのとおりである。

S K……土壤状遺構 S D……溝状遺構 S L……炉跡 S P……ピット S X……性格不明
遺構 R P……重要土器

⑤ 土色表示については、「新版標準土色帳」(小山・竹原編著、農林省農林水産技術会議事務局監修 1976)によった。

⑥ 土層断面図中の土層No.は、かならずしも層位順序を示してはいない。

⑦ 土層断面図には、正面から記録したものを左右反転して掲載した部分もある。

⑧ 土層断面図中、掘り底を示す線の下位に記した土層番号は、平面観察により得た地山の土色を示すものである。

⑨ 本書は、稻荷森古墳調査指導委員の指導および討議ならびに調査担当者間の協議をふまえ、つぎの分担を除き、吉野が執筆作成した。なお、写真図版および編集は吉野が担当した。

第1章の1	阿子島 功	第4章の3	茨木光裕
第3章の2, 4, 5, 6	吉野・茨木	第4章の4	加藤 稔
第4章の1	阿子島 功	附図	吉野・茨木

目 次

第1章 立地と環境		第4章 調査の成果	
1 稲荷森古墳の立地環境	1	1 稲荷森古墳の構造	15
2 稲荷森古墳の歴史的環境	4	2 遺構と人為的改変	20
第2章 調査の経緯		3 出土遺物	
1 調査に至るまでの経過	5	(D区R P 1を中心として)	22
2 今次調査の目的と方法	6	4 稲荷森古墳の形状	
3 調査の経過	6	—とくに古墳の築造企画の推定—	29
第3章 調査の概要		第5章 まとめと課題	
1 D区	7	1 調査のまとめ	33
2 E区	9	2 今後の課題	37
3 F区	9	註	38
4 G区	10		
5 H区	12		
6 I区	13		
7 J区	14		

挿 図 目 次

第1図 米沢盆地北東部低地の地形図	1	第9図 現在形状の微地形分類図	18
第2図 稲荷森古墳周辺の地籍図	2	第10図 築成以降現在までに 侵蝕された部分	18
第3図 稲荷森古墳周辺の遺跡と その埋没深度分布	3	第11図 前方部墳頂南端の改変状況	21
第4図 D区出土遺物	8	第12図 山口県下関市仁馬山古墳実測図	21
第5図 稲荷森古墳南北(NNE-SSW) 方向の断面図(概念図)	15	第13図 昭和53年度後円部4トレンチ出土 土器実測図	24
第6図 想定される原形の立体視図	17	第14図 昭和62年度後円部 4-1区土層断面図	24
第7図 現在形状の立体視図 (等高線間隔0.5m)	17	第15図 山形県内の古墳時代前半の土器	26
第8図 現在形状の立体視図 (等高線間隔0.2m)	17	第16図 稲荷森古墳推定企画図	31

表 目 次

表1 稲荷森古墳の墳丘における

発掘調査 20

表2 従前の発掘調査結果と昭和62・63年度

発掘調査結果の比較 34~35

写真図版目次

巻頭図版一 1 稲荷森古墳全景

2 稲荷森古墳D区出土土器

巻頭図版二 1 稲荷森古墳 I 区（昭和54年度 Z S 区）北壁土層

2 稲荷森古墳昭和62年度 4 – 1 区（昭和53年度第4トレンチ）東壁土層

巻末図版 図版 1 稲荷森古墳全景

図版 11 前方部G区（2）

図版 2 後円部D区（1）

図版 12 前方部G区（3）

図版 3 後円部D区（2）

図版 13 前方部H区（1）

図版 4 後円部D区（3）

図版 14 前方部H区（2）

図版 5 後円部E区

図版 15 前方部I区（1）

図版 6 前方部調査地全景

図版 16 前方部I区（2）

図版 7 前方部F区（1）

図版 17 前方部I区（3）

図版 8 前方部F区（2）

図版 18 前方部J区

図版 9 前方部F区（3）

図版 19 出土遺物（1）

図版 10 前方部G区（1）

図版 20 出土遺物（2）

写真A 4 – 1 区南壁 15

写真B Cトレンチ 2 – 3 区東壁 16

附 図 目 次

附図 1 稲荷森古墳実測図

附図 6 稲荷森古墳前方部H区

附図 2 調査区および主要遺構概要図

附図 7 稲荷森古墳前方部I区, J区

附図 3 稲荷森古墳後円部D区, E区

附図 8 稲荷森古墳後円部A, 4トレンチ
(昭和62年度調査)

附図 4 稲荷森古墳前方部F区

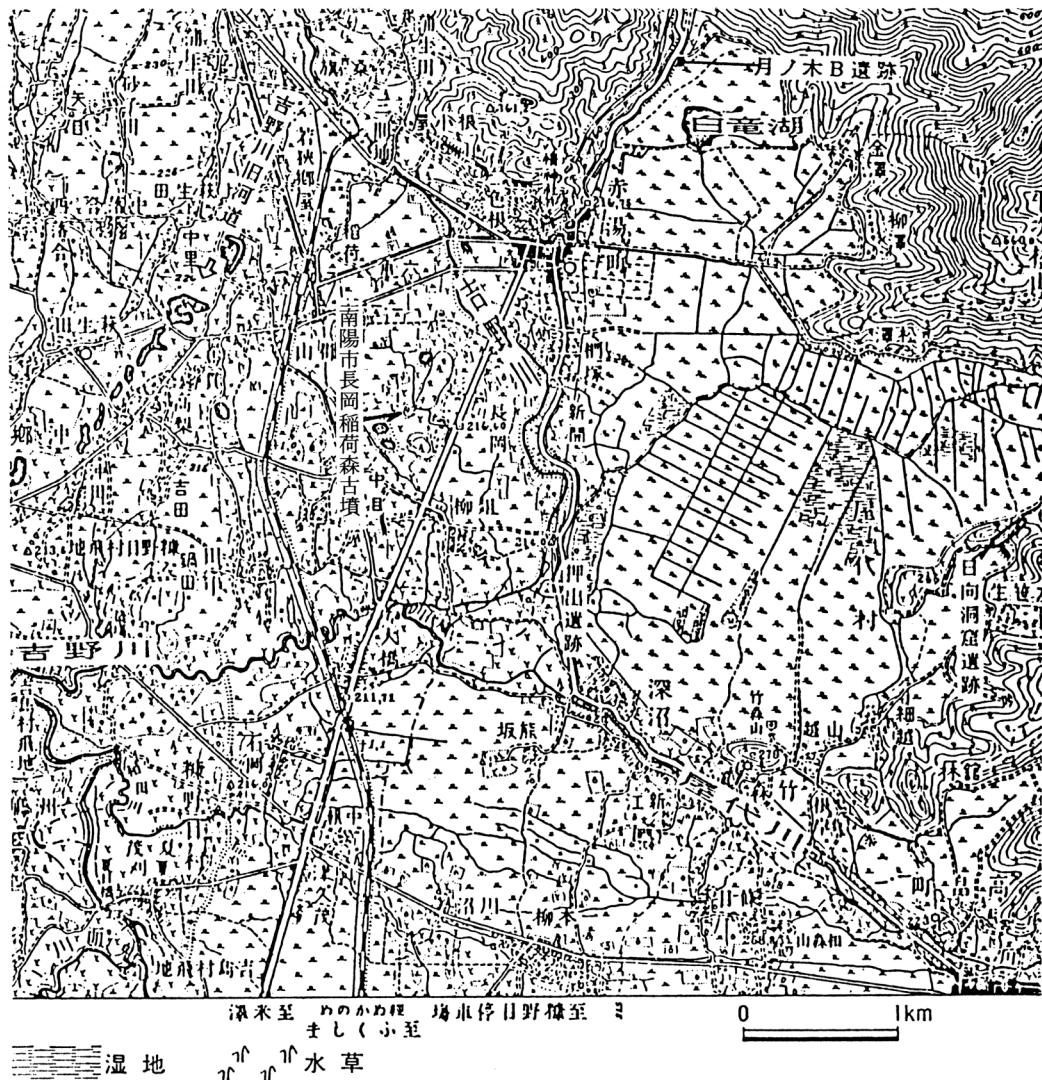
附図 9 稲荷森古墳後円部B, Cトレンチ
(昭和62年度調査)

附図 5 稲荷森古墳前方部G区

第1章 立地と環境

1 稲荷森古墳の立地環境

米沢盆地北東部の低地の地形は、大谷地(白竜湖)低湿地と吉野川扇状地の2要素に特徴づけられる(第1図)。米沢盆地北東部で発見されている考古遺跡は、大谷地低地に面した丘陵麓部、吉



明治43年測、大正2年発行の1:50,000地形図「赤湯」に付記。湿地のなかの「水草」の記号は明治42年図式から大正6年までにだけ用いられためずらしい記号である。

日向（ひなた）洞窟遺跡は縄文早創期、押出（おんだし）埋没遺跡は縄文前期、月ノ木遺跡は縄文早期以後のほぼ全期にわたる複合遺跡である。

稻荷森古墳を丘陵から切断している水路はおそらく人為的なもので格子形の折れ曲りに注意。(阿子島, 1988)

第1図 米沢盆地北東部低地の地形図（明治末）

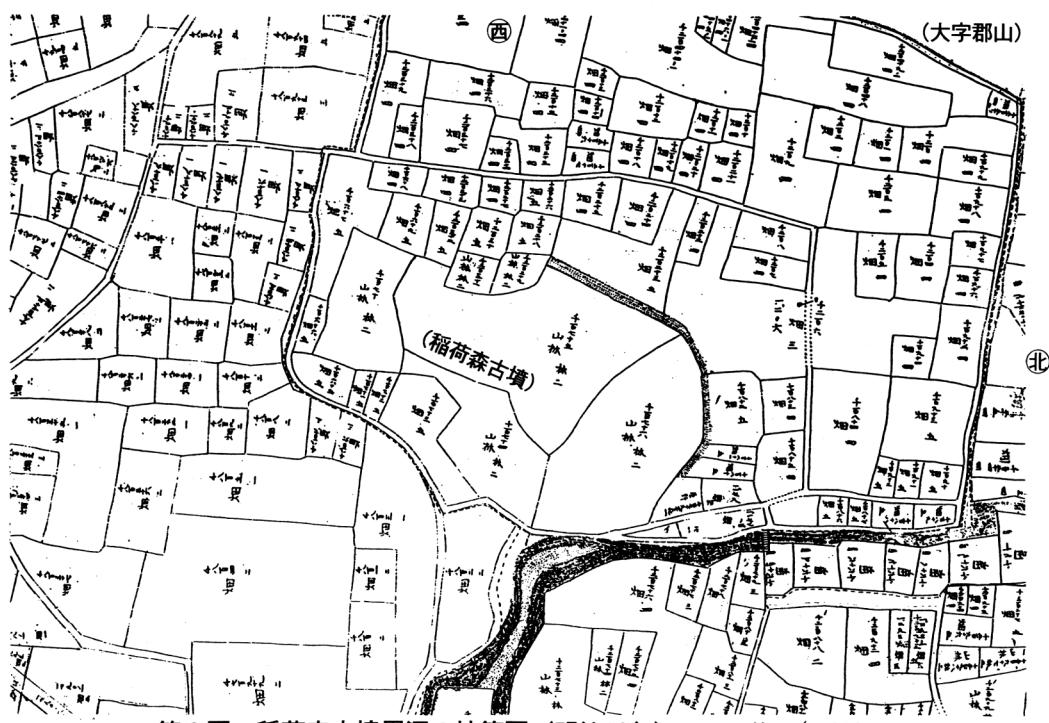
野川扇状地、吉野川扇状地に面した丘陵、吉野川扇状地低地のなかの小さな残丘にある。大谷地(白竜湖)低湿地と吉野川扇状地との境界付近の地表下2mから、縄文前期の押出遺跡が発見されている。

稻荷森古墳は吉野川扇状地低地のなかの小さな残丘である長岡丘陵（第三紀中新世の凝灰岩）の先端をきりはなして、さらに盛り土して作られている。本古墳周辺を含め長岡丘陵の西側に南北に連なる畠の列があり（第1図）、吉野川旧河道（自然堤防）のようにみえる。

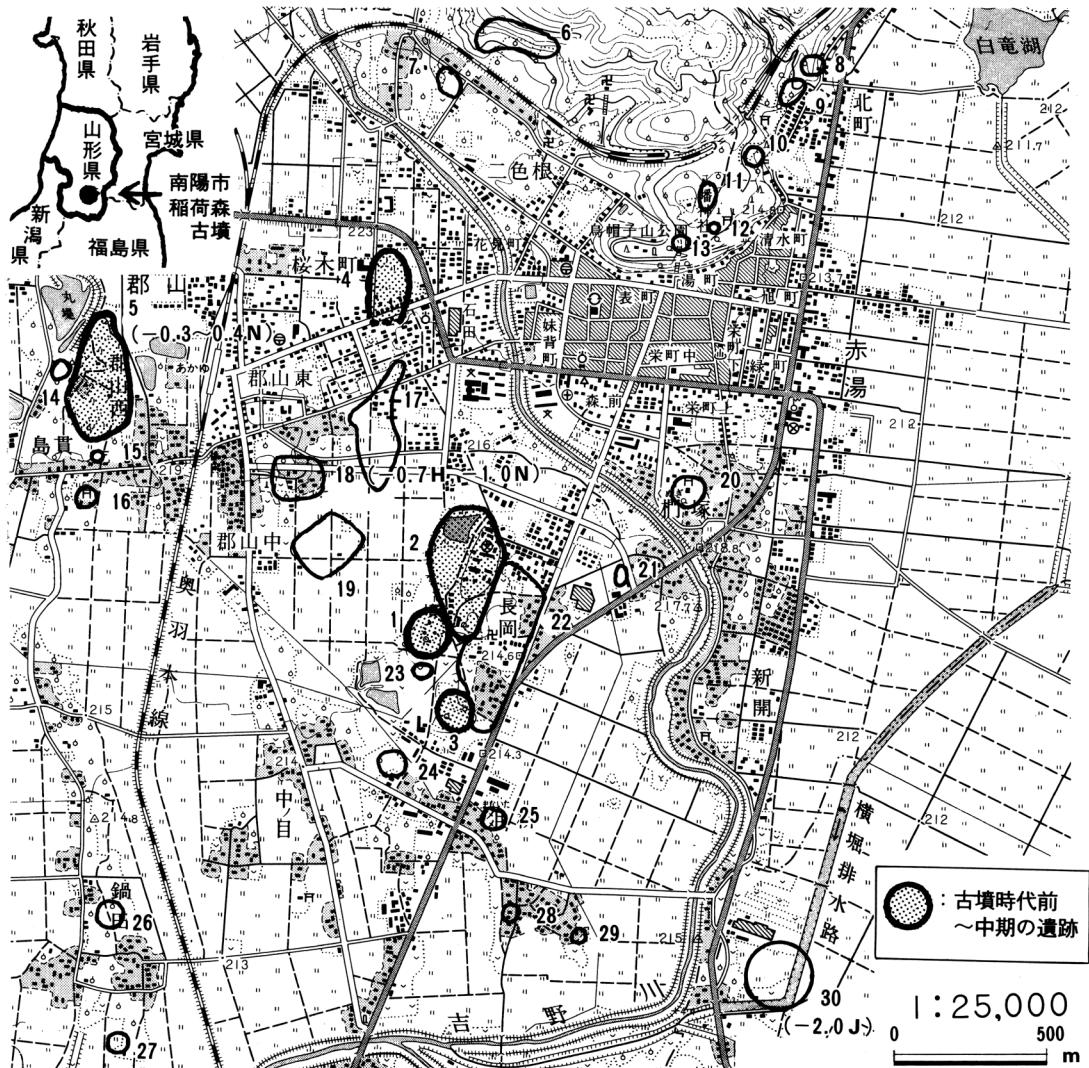
南陽市稻荷森古墳の周辺の遺跡の時代と埋没深度を、第3図に示す。稻荷森古墳が築造されたときの低地面の高度を考察する資料となろう。埋積性の米沢盆地北東部低地にあっては一般論として、古墳時代の低地の地表面は現在より数10cm低かったと考えられる。ただし、微地形の起伏は現在の吉野川ぞいにみられるように数mはあり、南陽市郡山の矢野目館遺跡の地山層で地表下1.2mの層準の¹⁴C年代が $2,690 \pm 160$ Y.B.P.(TH-1162)である一方、地表面採集調査で発見された長岡西田遺跡（第3図-23、縄文時代）他があるなど微地形によって遺跡埋没深度が異なるので第3図はこのことを参考に解釈される必要がある。

稻荷森古墳の北東側の、丘陵からの幅狭い切り離し部分を通る水路はいかにも不自然であり、人為的な感じをうける。その水路の北側の平面形は、第1図に見られるように格子型をなしてて条里制地割りとの関係が検討される必要がありそうである。

地籍図（第2図）によれば、古墳の範囲を山林が示し、その外縁を幅1-2筆分の畠が取り巻いている。その幅は、昭和54年（1979）調査によって存在が推定されている後円部北側地下のテラス帯の



第2図 稲荷森古墳周辺の地籍図（明治26年） S=約1/1,800



() 内の数字は、遺跡の埋没深度mを、また、Jは縄文前期、Nは奈良、Hは平安の各時代を示す。

No.	遺跡名	時代他	No.	遺跡名	時代他
1	稲荷森古墳	旧石器、縄文(中期), 古墳(前期), 平安, 中世	16	沢口	奈良, 平安
2	長岡山	旧～中石器、縄文(中期), 古墳(前・中・後期)奈良, 平安	17	東六角	縄文中期, 平安
3	長岡南森	縄文(中期), 古墳(前・中期), 平安	18	矢ノ目館	奈良, 平安, 中世
4	諏訪前	縄文(中期), 古墳(前期), 平安	19	早稻田	奈良
5	沢田	弥生, 古墳(中期), 奈良, 平安, 中世, 江戸	20	門塙館ノ山	縄文(後期), 中世
6	二色根古墳群	古墳(終末期)	21	太子堂	平安
7	横沢	縄文(中・後期), 奈良	22	長岡山東	縄文, 平安
8	夷平	縄文(晚期), 中世?	23	長岡西田	縄文(中期)
9	北町	縄文(前期)	24	中ノ目下	奈良, 平安
10	稻荷前	縄文(前期)	25	水上	奈良, 平安
11	上ノ山	縄文	26	大屋敷	平安
12	烏帽子山経塚	平安	27	畿内田	平安
13	烏帽子山古墳	古墳(終末期)	28	東畑A	平安
14	島貫	奈良, 平安	29	東畑B	平安
15	郡山中堀	奈良, 平安	30	押出	縄文前期(高畠町大字深沼所在)
18	矢ノ目館遺跡	-1.2m(地山層) 2.690±160年B.P. (TH-1162) [阿子島]			

第3図 稲荷森古墳周辺の遺跡とその埋没深度分布

(南陽市史考古資料編より作成)

幅より広い。また地籍図には、東側の切り離し部分の水路に中州が描かれている。

2 稲荷森古墳の歴史的環境

稲荷森古墳が立地する長岡山丘陵や周辺の平野部は、南陽市内でも比較的遺跡が集中している地域である（第3図）。

稲荷森古墳や長岡山遺跡からは、旧石器～中石器時代の石片が採集されている（註1）。続く縄文時代では、夷平、北町等丘陵と平地の境界付近に立地する遺跡や、長岡東、長岡山、門塚館ノ山等独立丘陵上に立地するものがみられる。

弥生時代の遺跡は少数であり、沢田遺跡の調査（註2）時に、中期・後期の土器が出土している。

近辺の古墳は、古墳時代後期からいわゆる終末期のものが主体的であり、二色根、鳥帽子山はじめいくつかの古墳群が北部の丘陵上に点在している。

奈良時代から中世にかけての集落跡は、主として吉野川扇状地内の微高地に存在し、沢田遺跡をはじめいくつかの発掘調査が行われている。とくに本古墳北西部の「郡山」地区は、さらにこの北方一帯に推定される「国郡制・条里制」とも関り、第2次古代置賜郡衙（奈良後期～平安初期）推定地とみなされている。

さて、稲荷森古墳築造前後ころを伺い知る遺跡については、現段階では発見例は少数であるが、平野部微高地上に立地するものと独立孤丘上のものがある。つぎにその概要を述べる。

諏訪前遺跡は、本古墳の北方約1kmにあり、吉野川の自然堤防上に立地している。昭和60年（1985）の調査（註3）の結果、土壙から塩釜式期の土師器がまとまって出土した。とくに、丹羽茂氏編年（註4）における第I・IIA・IIB段階の土師器の検出は、当該期の資料の少ないなかで特筆すべきものといえる。

長岡山遺跡は、本古墳に隣接し、標高約220mを測る。塩釜式期のほか、南小泉Ⅱ式の土師器と石製模造品が出土している（註5）。

長岡南森遺跡は、本古墳の南方約150m、長岡山同様の残丘上にある。昭和53年（1978）、稲荷森古墳調査団により、南小泉Ⅱ式期頃の土師器他が採集されている。

沢田遺跡は、吉野川旧河道の自然堤防上に立地し、標高は約221mである。昭和59年（1984）の調査（註6）では、2基の住居跡から、南小泉Ⅱ式並行の土師器がまとまって出土している。

なお、昭和53年度の調査時、本古墳の後円部墳丘盛土直下から塩釜式期に属する土師器高坏1が出土している（註7）。この土器は、昭和62年度の調査により旧表土中の住居跡状遺構に伴うものと考えられていること（註8）から、築造前の旧丘陵上に、当該期の集落等の存在が予想される。

このように、築造前後の時代の遺跡数は多くはないが、この古墳の被葬者の社会・経済的背景としての集落は、相当数存在したはずであり、今後発見例が増加することが望まれるものである。

第2章 調査の経緯

1 調査に至るまでの経過

(1) 発見から国指定史跡となるまで

稻荷森古墳は、昭和初期に新山三郎氏に注目され（註9）て以来、西村真次氏による報告（註10）および柏倉亮吉氏の2次にわたる調査（註11）、赤湯町史による前方後円墳説の提示（註12）を経て、昭和52年（1975）、山形県史編さん室・稻荷森古墳調査団等の測量調査により、ようやく大型前方後円墳として認識されることとなった（註13）。

その後、山形県立博物館により、昭和53年（1978、註14）、同54年（1979、註15）と発掘調査が行われ、周濠の有無、墳丘の規模、墳丘造成法等について多くの貴重な所見が得られ、少なくとも5世紀を下らぬ古墳であるとの考え方方がこの段階で持たれるようになった。

約96mと、主軸長では東北地方第6位（当時）、そして日本海側では北限の大型前方後円墳にあたることなどから、昭和55年（1980）5月24日付で国指定史跡となった。

(2) 整備事業開始

これらの経過をふまえ、南陽市教育委員会では、整備事業の第一歩として、まず、指定地内の民有地を公有化することとした。国庫補助を受けて、また、地権者や地元の方々の多大なご協力のもとに、昭和59年（1984）、指定地10182.7㎡の内8321.42㎡を市有地とし、公有地化が完了した。

つぎに、整備事業に際しては、墳丘および周囲の起伏を詳細に分析しうる、等高線数の多いより精度の高い測量図が必要なため、昭和60年度に測量調査を実施した（附図1）。

稻荷森古墳の保存、保護および活用のための整備の方法について、様々な見地から検討し、文化庁記念物課や、山形県教育庁文化課等の関係機関との協議と指導も得て、はじめに整備の基本構想を策定し、あわせて昭和62・63両年度に発掘調査を実施することとなった。これらに基づき基本設計を行い、昭和64（平成元）年度以後に整備工事にとりかかることを目標とした。

(3) 整備基本構想の概要

A 墳丘部　　原則として現状のまま保存・整備をはかるため、修復等は明らかな後世の改変部のみとし、墳丘斜面は、自生植物の養生により保護を図る。祠や石段を撤去のうえ、樹木残根の枯死化を図る。また、前方部・後円部両墳頂部およびくびれ部には、墳丘を痛めぬよう盛土のうえ見学路を設ける。なお、墳麓部は未調査の所が多いため、現墳麓線から3m程の緩衝（安全）地帯を設けこの外側に園路をめぐらせる。

B 平地部　　平地部には盛土をし、園路・古墳学習広場・四阿・フジ棚等を設けるとともに、修景に合う植栽を行う。なお、平地部にある遺構に影響ないよう十分配慮することとする。

(4) 昭和62年度発掘調査

整備の基礎資料を得るため、国庫補助を受けて、昭和62年10月16日から同年11月16日まで、南陽市教育委員会が主体となって、発掘調査を実施した（註8）。

調査は後円部を中心とし、つぎの目的で実施した。①葺石、埴輪の有無の再確認。②後世の改変部とくに墳丘の等高線の乱れている所の成因および段築部の確認。③墳麓線の確認。

調査地は、昭和53年度第4トレンチ、および新規A・B・Cの各トレンチ（附図2）である。

2 今次調査の目的と方法（附図2）

今次調査は、前方部を中心に、面的精査を主体としてつぎの目的で実施することとした。

- | | | | |
|------------------------|----------------|---------------|------|
| ① 後世の改変部の確認（D・E・F・K各区） | ④ 見学路予定地で未調査の所 | （L区） | |
| ② 周濠の有無の確認 | （I・J各区） | ⑤ 葺石・埴輪の有無の確認 | （全区） |
| ③ 前方部端部の残存状況の確認 | （G・H・I各区） | | |

調査の方法としては、墳丘については、保護のため調査面積を最少にするとともに、残存状況確認のため表土除去により面的に観察することを基本とし、深掘りは必要な所について最少限サブトレンチを設けることとする。ただし、I区南部とJ区東部の一部は昭和54年度調査地のため、確認の目的で従前深度まで再発掘することとした。平地部については、遺構プランを確認のうえ、記録用にサブトレンチを配し、全掘は行わないこととし、また、とくに、墳麓部等に係る主要な遺構については、将来に備え、部分的に未発掘のまま保存することとした。

3 調査の経過

調査は、前半期間に主として後円部を、後半に前方部を実施した。また、前方部を中心に、墳丘面確認と調査区設定のため、草刈りと残根再切除を行った。調査の経過はつぎのとおりである。

8月1日～3日 調査開始、D・E調査区設定、同掘り下げ開始。

8月4日～9月21日 D・E区調査し、終了後埋戻し実施。F・G・H各区調査着手。

9月22日～10月31日 前方部各区調査し、終了。J区着手。

11月1日～11月21日 J区調査し、終了。埋戻し全作業終了。

11月22日 全調査終了。〔調査面積は合計約239m²〕

調査期間中、稲荷森古墳調査指導委員による現地指導と検討が行われた。また、山形県教育庁文化課によりI区南壁の土層断面剥ぎ取り調査指導が行われた。

調査予定地の内、K区は、調査範囲をさらに大きく広げないと改変状況がつかめぬことから、また、L区は、調査予算と期間の制約上からいざれも調査を実施しなかった。

第3章 調査の概要

1 D区 (附図2, 3 卷頭図版1 図版2~4)

稻荷森古墳後円部は、従前諸調査により、段築第1段目付近までは、旧丘陵地山の削り出し整形により築造されたと確認されている。しかし、北東の裾部は、部分的に密になった等高線が示すとおり、何らかの後世の改変を受けているとの予想から、状況把握のため、昭和62年度調査地Bトレーニング東方に調査区を設けた。

はじめに、長辺の方向を後円部中心に向けた8m×3mの調査区を設定した。表土と第2層を主に除去した結果、SD1, SK1, SK2, SX1の各遺構プランが検出され、この内SK1をはじめに完掘した(附図3(1)下段)。SK1は、直径1.5m程の浅い土壇で、比較的新しい時期のものである。なお、SK1, SK2ともに遺物は検出されなかった。

この段階で、SX1は、昭和62年度調査のBトレーニングにおける「地山の段差とその堆積土」との類似性が認められたことから、「墳丘残存部」との予測を持ち、D区東側に4m×3mの拡張区(D東区)を設け、両区ともSX1を中心地山面まで掘り下げて性格把握をめざした。

その結果SX1は、硬質な地山風化土第3層の一部から、地山第15a層に認められた「段差およびその堆積土」であることが判明し、また、この段の比高は約15cmを測る。段の平面形態は、ゆるい弧状を呈し、これは、さらに東部や西部の現地表上の墳麓線とも整合性を持つものである。なお、この段差の法線は、後円部中心部に向かうことが確認できる。

段の低位側に堆積した土層の内、第8層は黒褐色を呈するが、第7・7'・9各層は、地山土を主体とした比較的明度の高い砂質粘土である。また、第8層の一部と第7層とは、とくにD区西半において、あたかも第2層下面により切断された如き不自然な堆積状況を示す。

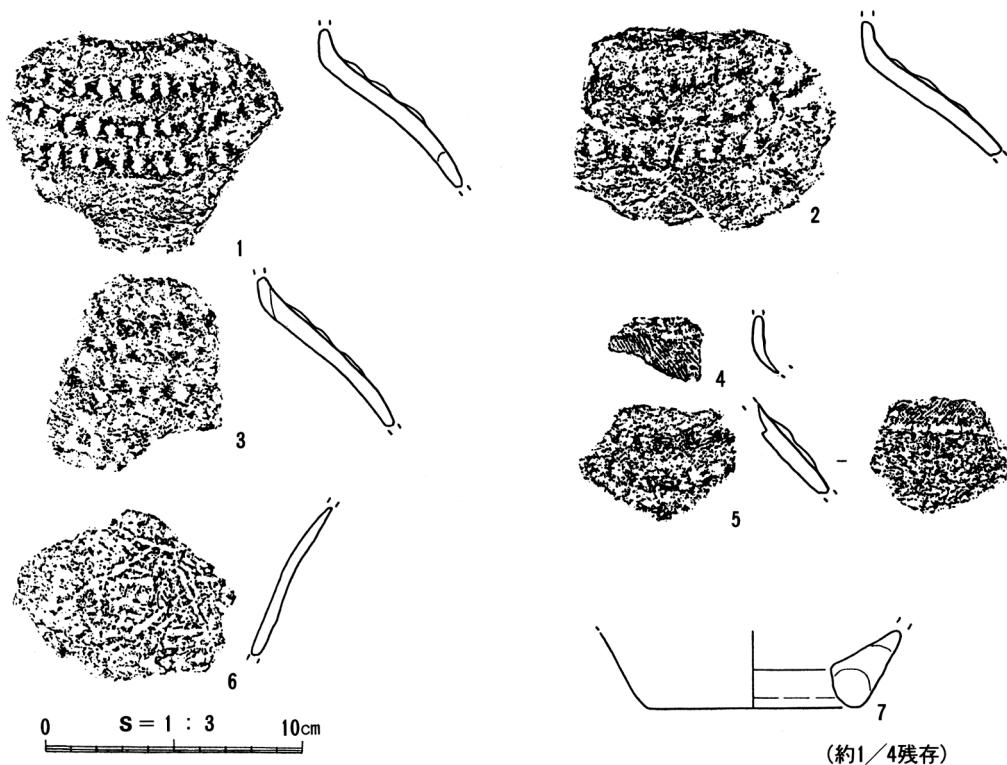
これらの状況から、SX1の段差は、第7層堆積後第2層までの間に削平を受けた墳丘の残存部とみなされる。したがって、第7~9層は、築造後比較的短期間に形成されたものと考えられる。

第7層下位に認められたSD3は、地山に掘り込まれた小溝である。覆土の内F2~F4各層の土質は、各々第7'・8・9各層と対応して強い類似性を持ち、両ループの土の起源および堆積時期には大差がないと考えられる。

SD1は、上場の幅が約2.1mの溝で、覆土中位にS'1が存在する。覆土F1から中世陶器片が出土している(図版19の1)。SK3・4は、共に上から掘り込まれた新しい時期の土壇である。

D区西部の第7層中位からSD3 F1上面にかけて、土師器(RP1)がややまとまって検出された(第4図、卷頭図版1)。摩滅と風化が著しいため、図化可能資料を中心に概要を次に述べる。

色調は明褐色を呈するもの、およびやや黄色を帶び橙色を示すものが主体的である。胎土は粗粒



第4図 D地区出土遺物 (RP 1)

(No. 1～7は、巻頭図版1、附図3中の出土状況図の番号と対応する。)
 (4の外面下半と5の内面上半は接合する。)

砂を含み、良質ではない。焼成や器体の成形も良好とはいえない。

第4図1～5は、壺の頸部から胴上半部になだらかに続く部分である。1・2・4の上端は、口唇部の可能性も考えられる。

胴上半部には、隆帯状に幅1.1cm程の粘土紐を3段張りつけ、その上にヘラまたはクシ状工具と思われるものにより、断面V字・U字状の刻みが縦に施されている。隆帯間には、横方向のナデがみられる。4の外面下半と5の内面上半部は接合するものであり、両接合面には、ハケ状工具による加工痕が認められ、成形時の痕跡と考えられる。6は、胴下位にあたり、棒状工具による沈線状の痕跡が部分的にみられる。7は、焼成前穿孔を施した底部で、底径は約8.2cmを測る。孔内部器面は内傾し、とくに下端は上半より傾きが著しい。

当該出土資料は、摩滅と風化が著しくかつ脆弱なため、接合作業は部分的に留まり、全体器形はまだ明確でないが、出土状況や器質・胎土等から同一個体の可能性があり、また底部穿孔壺形土器(土師器)と推定される。加えて、出土層位の分析により、築造後そう間をおかぬ頃の時期が考えられることから、当土器の時期が古墳の築造年代をおおむね示すと考えられる。

当該土器は、古式土師器の様相を持ち、とくに肩部の「三段の隆帯上の横走する縦位列刻文」とでも呼ぶべき特徴は、近接地では類例がみられず、今後の類似資料の出現を望むものである。

2 E区 (附図2, 3の(2) 図版5)

E区は、後円部東側の、低平な長岡山丘陵に接した挾窄部に設定した調査区である。この付近では、後円部墳丘と東側に連なる丘陵との間隔は、約8mと接近し、また、丘陵側裾部をめぐるよう堰が流れている。E区を設定した地点は、墳丘が大きく馬蹄形状に崩落し、地山が露出している。本調査区では、墳丘整備時の基礎的資料を得るため、当該地点の崩落深度の確認、接近する丘陵との関連、および、墳麓線の検出などを主な目的として調査を実施した。ただし、墳丘裾部に接して農道があるため、面的に把握することは出来なかった。

墳丘部については、上部から崩落した再堆積土を除去し、地山面を露呈させるとともに部分的にサブトレンチを設定し、土層の観察を行った。また、墳麓部は農道部分を除外し、地山面まで掘り下げて、精査を実施した。

その結果によれば、調査区内の墳丘確認面では、粘質の強い淡黄色、明黄褐色を呈する硬い地山層（第15a, 15b層）があり、その上位に風化のやや進んだ土層（第6層）の堆積が認められる。墳丘裾部に近い部分には、不規則な凸凹があるが、とくに遺構としての性格をもつものとは考えられない。地山層の比較的硬い部分が、不規則な嶋状に残ったものである。墳丘裾部は、現在の農道と接しており、部分的に人為的な削平も行われていると考えられる。

また、その東側に、箱堀状の地山の落ち込みが検出された。底面は平坦で、落ち込み内の堆積土層は、いずれも粘性の強い暗青灰色・青黒色を呈する微砂、シルト層で構成される。その堆積土層の特性としては、水底堆積物と考えられる。この箱堀状の落ち込みの底面の第16層は硬質が著しいが、地山層から掘り込んだ幅30cm程の浅い溝（SD2）が検出された。

また、E区北壁にそって、前記した箱堀状の地山落ち込みの上場を切って、SK5が検出された。SK5は、径70cmの円形を呈する。両者の切り合いについては、地山面では、SK5が箱堀状落ち込みの上場を切っているが、この落ち込み内に堆積した土層上面（11層面）をも掘り込んでいるのかは、湧水などのため明確にはし得なかった。

出土遺物はとくに認められないが、SK5の確認面では覆土につきささるような状態で、斜位の平行状叩き目痕をもつ須恵器甕の破片（図版19の6）1点が検出されたのみである。この須恵器破片はSK5に帰属するものと考えられる。

3 F区 (附図2・4 図版6～9)

前方部墳頂部の内、北半は比較的平坦な姿を示すのに対し、南部では起伏がみられる。とくに南端西半部には、「低い塚状の高まり」が存在し、同東半部では等高線が乱れている。

これらの成因については、「前方部墳頂南部は、元々同北半から続く平坦地であって、後世に西

に高く東に低く大きく改変を受けた」という考え方や、「当初は南部に壇状の盛り上がりがあり、その東半部が主に削平を受けた」という見方があった。加えて、本古墳墳頂部に見学路のための盛土を行う基本構想が出されたこともあり、改変状況の確認のため調査区を設定した。調査は表土除去を中心とし、表土下は必要部分に最少限のサブトレンチを設けて、確認することとした。

F区北壁の東半部では、第8～13層、第15～17層、第19～26層が盛土層（積土）として確認された。平面形状では、中央部東のかく乱部、さらに東では、SD8・SD9が検出された。両溝の覆土は、黒褐色や暗褐色のやわらかい粘土質砂を主体とし、あきらかに後世の遺構と認められる。このように東半では広く改変を受けている状況が見られた。表土直下で確認された盛土残存部は、SD8東西両側と、調査区東端の部分である。とくに後者は、硬い褐色系粘土質砂層が主体的であり、標高219.50m前後において東と南に落ち込む傾斜変換部を有する所である。前方部全体形状から見て、当該部分は、墳頂東南コーナー部の残存部とみられる。

調査区西半では、明らかに盛土層と確認できたのは第32層からであり、盛土状況が良好に観察できる。第27～31層は、褐色土系土層であって、盛土としての可能性はあるものの断定はできない。

平面形状では、D7基準杭西隣に赤褐色土の平坦面が検出され、この標高は約220.30mを測り、F区内では最も高い「盛土残存部上面」となる。当平坦面の北西と南西方向には、コーナー状に傾斜変換部が検出された。当該地は、F区東端の状況との比較や、土層・標高・墳形等全体から見て、おそらく前方部墳頂南端の、元々一段高くなっていた部分のコーナー部（肩部）と考えられる。

さらに北西方面では、標高220.10m付近で一時傾斜角が急になり、続いてなだらかに斜面が続き、盛土状況が平面的にも確認できた。この斜面の傾斜角度は、水平方向から約20度弱を測り、他の墳丘斜面に比して著しく傾斜の緩い部分である。そして、前方部南端墳丘全体形状から見れば、F区北西のE-E'壁付近を変換線として、F区内側にくらべ、墳丘現地表面が急な傾きで墳麓線に至ることがわかる。なお、当斜面では、盛土層に掘り込まれた遺構は確認できなかった。F区では、古墳にともなう遺物は検出されなかったが、第53層（盛土層）から、縄文時代の遺物が出土している（図版19）。

これらのことから、F区西半の緩傾斜面付近では、広く削平または崩壊等の改変を受けている可能性が十分考えられる。

4 G区 (附図2, 4 図版10～12)

G区は、前方部前端の東側コーナー部分に設定した調査区である。当調査区では、前方部墳形の確認、および墳丘周縁部の状況把握を主な目的とした。前方部前端の西側コーナー部分に設定したH区と対応する。G区では、当初、基準杭に基づき、墳丘にそって「L字形」に調査区を配置したが、調査の進展に伴い、北壁、西壁にそった拡張区をそれぞれ設け、精査を実施した。

墳丘コーナー部北側の前方部東側縁部では、墳麓部付近に、不整形の大きなかく乱（S X 2）があり、墳丘斜面に土壙（S K 6）が掘り込まれてある。S X 2は、舌状にのびる浅い溝状遺構（S D14）と複合するが、両者の時期的前後関係については、遺構確認面のレベルでは判然としない。S D14は、中央部で幅1.3mを測り、覆土は、暗赤褐色を呈する砂質粘土層によって構成される。また、S X 2は、表土直下に地山の赤褐色土（第8a層）を多く含む、しまりの悪い暗赤褐色土層（第4層）によって確認され、墳丘面下におよぶかく乱である。

前方部南端側では、墳麓部に地山の段落による傾斜変換線が認められ、その南側は、平坦な面を構成する。この地山の段落の下場に隣接して、東西に走る浅い溝（S D15）が検出された。S D15は、確認面で幅約25cm、深さ約5cmを測る。地表面からかなり浅いために、墳麓部において認められた地山の段落とS D15の関係は、明確には把握し得なかった。西壁断面（F-F'断面）の検討によても、表土直下から掘り込まれたS D15がさらに何らかの改変を受け、底面付近のみが残った可能性も高いが明確ではない。しかし、後述するように、墳麓東側縁南端の一部に、地山の段落による傾斜変換線が認められ、この段落は墳麓線と考えられる。前述の前方部前端部で検出された地山の段落がこれに対応するものとすれば、前端部墳麓線部分として理解できる。

墳丘南側は、地山が浅く、溝、土壙、ピット等の遺構が検出されたが、いずれも、直接的に古墳にかかわるものとは考えられず、古墳築造以後の所産と理解される。S D 5は、墳麓コーナーの一部に接して、東西に走る溝で、幅1.2m前後を測り、G区西端部では若干広がる。覆土は、暗褐色・暗赤褐色を呈する粘土質砂層によって構成され、底面には、炭化物、および地山土の小ブロックを含む土が堆積している。S D 5は前述したS D15、S K 9、S K 8を切っており、数時期にわたる切り合いが認められる。

S D 5の南側、G区西拡張区に、S D 5とほぼ並び走る2条の溝の落ち込みが認められる。S D 6は、確認面での幅1.4mを測り、覆土は暗褐色および暗赤褐色を呈する粘質土の薄層によって構成され、地山土ブロックの混入が比較的多く認められる。断面は浅い皿状を呈する。S D 7は、北端上場側のみ、落ち込みが検出され、南端までの規模は調査区外のため不明である。覆土は、黒褐色土、黒色土、暗赤褐色土によって構成される。

また、G区東拡張区の東端部に、前述したS D 5、6、7の3条の溝に交差するごとく南北に走る溝状遺構の上場が検出された（S D 4）。覆土上位層は、赤褐色、暗赤褐色を呈する粘質土の薄層が堆積しているが、下位は黒褐色を呈する土層の堆積が認められ、S D 7覆土層と近似した状況を呈する。両者が同一遺構である可能性もあるが、調査区外のため明確ではない。

遺物は、表土から須恵器片が数点出土した。また、S D 5、およびS D 7の覆土第1層より、須恵器甕の口縁部、体部破片が若干出土している。各遺構とも、プラン確認にとどめているため、明確な帰属時期を決定する遺物の出土はとくに認められない。なお、S D 5に設けたサブトレンチ（J

— J' 断面) 内の覆土第3層から鉄器破片1点(図版19の15)が出土している。

5 H区 (附図2, 5 図版13~14)

H区は、前方部前端の西側コーナー部に設けた調査区である。G区、I区の各調査区とともに、前方部南端部の墳形把握を主な目的として設定したものである。墳丘部については、表土を除去し、墳丘面の検出に努め、墳丘外側の周縁部は、地山面まで掘り下げて遺構の検出を行った。

その結果、墳丘部では、調査区北半部の北東端に、旧丘陵の元々の表土(旧表土)と考えられる黒褐色を呈する粘土質砂層(第2層)が認められた。しかし、南端部側では、同層が認められず、当該部分では、地山の削り出しによる墳丘築成を行っているとみなされる。

前方部西側縁側の、旧表土(第2層)が確認される所のさらに西方(下方)では、地山の削り出しによる墳丘築成が行なわれており、墳麓部に地山の段落による傾斜変換線が認められる。また、墳麓部には、前方部西縁から前端部へめぐる幅75cm前後の溝(S D18)が検出された。その他の遺構としては、墳丘裾部に掘り込んだSK11(陶磁器片、ピン等が出土、最近のゴミ捨て穴)および調査区南壁にそって東西に走るS D19、S D20などの溝が認められる。また、墳丘外側の平坦面には、ブドウ畠のアンカー埋設に伴う掘り込みがある。

調査区北半部北壁の西部に、地山のなだらかな落ち込み線が確認された。北壁(A-A')の断面観察の検討によれば、墳丘部に旧表土と考えられる黒褐色土(前述)があり、その下位に漸移層的な、暗褐色を呈する薄層(第4層)が認められ、地山(第8a層)へと移行している。さらにその西方、墳麓部側では、この旧表土を切除し、地山を削り出して、墳丘を築成している状況が把握できる。墳丘裾部にそって、巡るような状況で検出されたS D18は、土層断面(A-A'断面)の検討によれば、表土直下から掘り込んでおり、覆土は、しまりの悪い暗褐色、および暗赤褐色を呈する砂質土によって構成される。したがって、S D18は、古墳築造後に掘り込まれたもので、墳麓線は、このS D18範囲内に存在したものと考えられる。

前述の北壁西端部で検出された地山層のなだらかな落ち込み線は、その上面に堆積した第5、6層が、褐色、暗赤褐色を呈する粘土質砂層で構成され、沖積層と考えられることから、長岡山から連なっていた原丘陵の端部を画するものと考えられる。一方、H区東端(C-C'断面)では、墳丘部には旧表土層ではなく、表土直下が地山層となり、地山の削り出し部分と認められる。

なお後述のとおり、前方部I区では、現在の墳麓から約16.5m離れた南端部に、当調査区で検出されたなだらかな地山の落ち込み線と同じ性格をもつと考えられるものが確認されており、原丘陵は、当調査区付近から墳丘主軸線上の南方にむけて、大きく張り出していたものと推定される。

出土遺物としては、墳丘周縁部の表土、および溝の覆土上面より、口縁部に波状のヘラ描文をもつ須恵器甕破片(図版20-7)、斜位の平行状叩き目痕をもつ須恵器甕体部破片(同8)、須恵器質

の中世陶器片等が数点出土した。また、表土から、長軸方向に数条の溝をもつ有溝砥石（いわゆる、矢柄研磨器、同9）1点が出土している他、拳大の礫が集中して認められたが、当該期の遺構は検出されなかった。

6 I区（附図2, 6 図版15~17）

I区は、前方部前端、中央部の主軸線付近上に設定した調査区で、前方部墳頂部の横断方向に設定したF区に直交的に接する。調査区は、墳頂肩部から墳麓部およびその外周部に及ぶトレンチで、墳丘形状、とくに前方部前端部の墳頂肩部の把握と、墳麓線の検出、外周部の施設（とくに周濠）の有無の確認等を主な目的として精査を実施した。なお、当調査区は、昭和54年度調査のZ S区を一部含み、この部分については旧発掘底面まで再発掘し墳丘築成状況の把握・検討を行った。

I区北端部では、F区西側で検出された墳頂肩部に対応する傾斜変換線が確認された。墳麓部（旧Z S区内）では、表土直下から掘り込まれた、東西に走る幅50cmの溝状遺構（S D16）を新規に検出した。この溝の覆土は、暗赤褐色を呈する軟らかくしまりの悪い砂質粘土によって構成されており、S D16は墳丘築造後に掘り込まれたもので、墳麓線はこの遺構範囲内にあったものと考えられる。

また、I区南部では、平坦な地山面の南部に、なだらかな傾斜を保つ地山の落ち込み線が認められた。当部分から墳麓部まで距離約16.5mを測る。この地山の落ち込み部の上位には、黒褐色を呈する粘土質砂層（第19層）および、暗赤褐色を呈する粘土質砂層（第20層）が、地山の落ち込み傾斜にややそった堆積状況を示しており、原丘陵の端部の残存部と考えられる。

土層断面の検討によれば、墳丘部では、斜面ほぼ中央に、黒褐色を呈する旧表土層（第13層）があり、その上部に黒褐色土、明赤褐色粘質土の互層状の盛土状況が認められる。その下方、墳麓線までの墳丘面は、地山を削り出していることが確認される。

これらのことから、断面図でみれば、墳丘部で検出された旧表土層（第13層）とI区南端部で検出された地山の落ち込み線を結ぶラインが、原丘陵の形状をほぼ反映していると考えられ、墳麓部から、地山の落ち込み線におよぶ平坦面は、古墳築造にかかる整地帶として理解できる。

この平坦面には、東西に走る4条の溝状遺構が検出された。S D10は、幅1.8m、深さ55cmを測り、S D11を切っている。S D10の覆土は、暗褐色および暗赤褐色を呈する粘土質砂層で構成されるのに対し、S D11では赤褐色を呈する砂質粘土層が主体をしめる。なお、昭和54年度Z S区調査所見における「地山落ち込み線部」は、当S D10北半のことを示すものと考えられる。また、S D12は、その南端部をS D13が切っているが、確認面での幅5.8m、深さ約60cmを測り、比較的規模の大きい溝である。覆土上～中層では、暗褐色～黒褐色系を主体とする砂質粘土層があり、底面に近い下層部には、黒色および黒褐色を呈する粘性のつよい泥炭質土層の堆積が認められる。S D12か

ら遺物は検出されなかった。

I区の出土遺物は、表土から、表面に叩目痕をもつ須恵器甕破片（図版20の12）、剝片、碎片（同13）等が数点出土したのみである。また墳丘斜面で認められた旧表土層（第13層）から縄文土器片、土師器片（同10, 11）が検出されたが、細片のため、帰属時期は明確にはし難い。その他、とくに遺構に伴うような状態での遺物の出土は認められなかった。

7 J区（附図2, 6 図版18）

本古墳西側くびれ部は、昭和54年度にKW区として調査が行われ、旧丘陵地山落ち込み部・地山を削り出して整形した平坦部（テラス帯）・墳麓部・墳丘面等築造に係る成果が検出された地区であるが、周濠は未調査の所であった。このため、KW区の一部を含め幅1m、長さ19.5mの調査区を設け、周濠有無確認を中心に調査した。

J区東半の、旧KW区再発掘部分では、旧丘陵地山落ち込み部、地山削り出しによる平坦面、墳丘の一部を再確認のうえ、新規にSD21とSK13を検出した。墳麓のSD21は、幅1～1.2m程の浅い溝で、表土直下に確認され、その覆土は、褐色、明褐色を呈し、軟質である。走行方向は、墳丘の等高線にはば添うことから、おそらく一定範囲墳麓部をめぐるものとみなされる。墳麓線は、当溝の範囲中に存在していたものであろう。遺物は出土しなかったが、土層断面状況から見てSD21は築造後のものと考えられる。SK13は、表土中～下位から掘り込まれた小土壙で、獸骨片若干が出土し、新しい時代のものとみなされる。

調査区西半では、第7層は整地層（または埋土層）、第8・10・11層は平安時代の土器（図版20の14・15）の包含層、また第10・11層には、地山土の粒子やブロックが混入している。

旧KW区調査所見では、今次調査第8・10・11層と同様の深度・層位から遺物が出土し（「寺」の墨書き土器を含む）、また近辺に井戸跡と思われる遺構プランを検出していることから、J区の周辺には該期の遺構が存在しているものと思われる。

なお、周濠とみなされる遺構は検出されなかった。

第4章 調査の成果

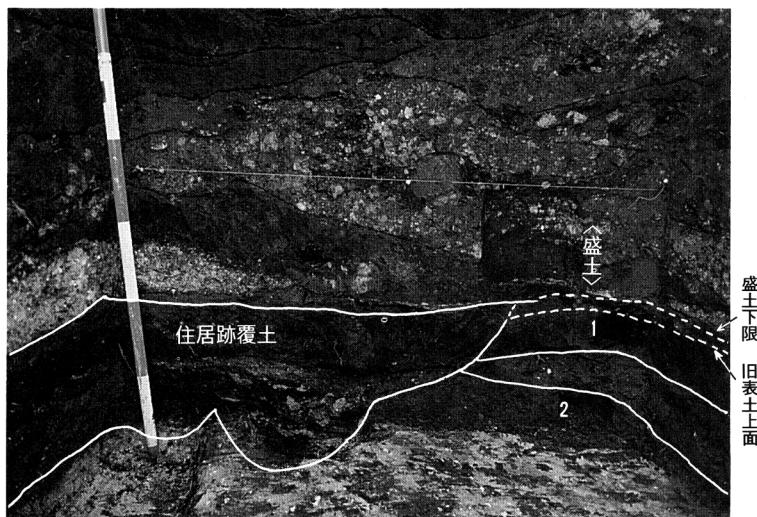
1. 稲荷森古墳の構造

(1) 自然地形・地山層

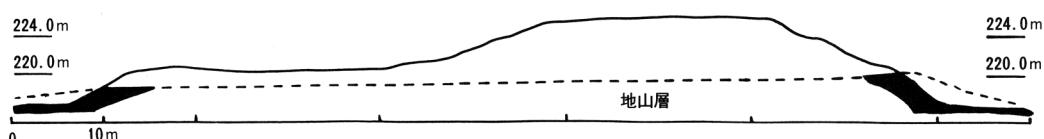
南陽市稻荷森古墳は、赤湯園芸高校ののる第三紀中新世の凝灰岩からなる低い丘(最高点222.5m,周囲の水田面より約7m高い)の西側を切り離して、これを土台とし、主に切り土を盛り立ててつくられている。これまでに確認された盛土層と地山層との境界の位置と高度は次のとおりである。

前方部	西端	H区	217.3 <
前方部	中央	I区	218.4 m 盛土層／地山層上限の黒土層(層厚10+cm)の境界
前方部	東端	G区	216.9 <
後円部	東端	E区	218.2 < 地山層の新鮮な灰色の凝灰岩
後円部	北端	4 トレンチ	220.5 m 盛土層／地山層上限の黒土層(層厚15cm)の境界
後円部	北西端	C トレンチ	219 < 地山層上限
後円部	南西端	J区	217.8 <

すなわち、地山層の上限は約100mへだてた南北両端で、最大でも2.1m程度であり、古墳の土台とされた丘陵はごく平坦な地形であったことになる。さらにいくつかのトレンチでも地山層上限にかつての表土である黒土層が保存されており、後円部北側4トレンチでは旧地表面の下位に黒土



写真A 4-1区南壁 1 黒土層1(旧表土) 2 黒土層2



第5図 稲荷森古墳南北(NNE-SSE)方向の断面図(概念図)

層が2層あって、その下位層(第49層)は縄文中期の遺物を含み、かつ住居跡？・プラスコ状土壌がほりこまれているように、丘陵頂面は履歴の古い自然の地表面であったことになる。(第14図、附図8、昭和62年度発掘調査報告、p.9 第6図参照)

4トレンチ1区の南西隅では、住居跡状のおちこみに切られる地山層の上位の黒土層1(写真A-1、旧表土第47層黒色土 層厚15cm)の中位の¹⁴C年代測定結果は $2,900 \pm 90$ Y.B.P.、その下位20cm前後にある黒土層2(写真A-2、第49層黒褐色土 層厚10cm)の¹⁴C年代測定結果は $5,190 \pm 100$ Y.B.P.である(山形大学よりTeledyne Labo.に測定依頼。それぞれI-15,596,597)。

墳丘造成のため削り出しによって地形改変量が大きいのは東側・北側であろう。東側の切り離し部の墳麓部付近では、地山層までの深度は地表より0.7mである(附図3,E)。北側の墳麓の外縁(1978年発掘の1トレンチ)では墳麓線より約10m北方まで地山層が0.5m程度と浅くつづき整地帯が想定されている。

地山層の風化状態は北側墳丘斜面では赤褐色(2.5YR5/8、整形前の地表面を水平と仮想すると地表下1m、斜面であったとするところより少ない)、東側墳麓では仮想される地表下2m(217.5m)では褐色、地表下4m(215.5m)ではにぶい橙色7.5YR7/4である。相対的に東側の地山層が新鮮な(地表下深度が深い)感じをうける。

段築3段のテラスのうち最下位のテラスは、北部のCトレンチ・4トレンチでみるとかぎり、地山層上面ではなく、さらに1.5m程盛土してつくられている。

(2) 盛土・整形法

【整形法】盛土層は、北部のCトレンチ・4トレンチでみられるように、赤褐～黄褐色の地山層風化土と黒色系の旧表土の互層である。赤褐系の起源は地表に近い風化帶、黄褐系の起源はやや下位の風化帶であろう。

地表面に平行する厚さ20~40cmの暗褐色～黒褐色の土層が断面図に描かれている(下限は不明瞭)が、Cトレンチの一部で観察されるように(写真B)、ほぼ水平な盛土層の層



写真B Cトレンチ2-3区東壁

*の淡色の部分は盛土層の名残

現在地表の風化土壌で

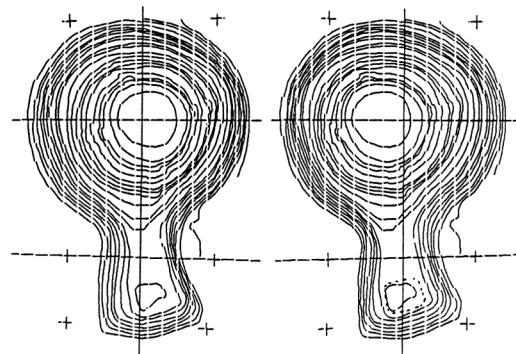
ある。墳丘表面に対応する化粧土層、またテラスおよび後述のスロープに対応する盛土層は確認されなかった。したがって、テラスの整形が、盛土のみによるものか、盛土ののちさらに削り出したものは確認できない。

【原形の推定】復旧した1m間隔計曲線によって、盛り土量を概算(1/200図を用いて電算機にデジタイザー入力)すると、約9,000m³である。

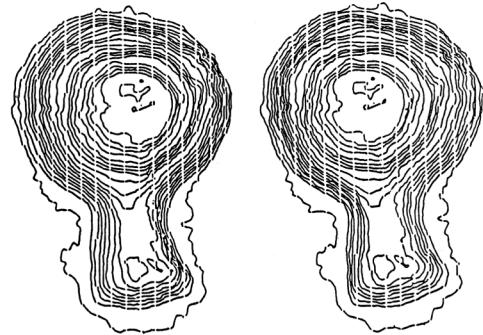
侵蝕による変形を補い築成当時の形を復原推定するため、谷埋め法(復旧面法)を用いた。1/200図において雲形定規によってなるべく滑らかな等高線となるよう作図した結果が第10図であり第6図はその縮小した立体視図である(阿子島、1989)。墳頂面から最下位のテラス(前方部頂面のレベル)にかけてほぼ東西南北の4つの突起(スロープとよぶ)を描いたのは、現在等高線の外縁で復旧面を描くと大きすぎることと、それぞれの突起の両側に侵蝕谷が位置することが多いことにもとづいている。4つの突起はそれぞれわずかに左まわりにふれているようにみえる。また突起の方向は墳丘主軸線と斜交する。この突起はテラス間の相対的に急な斜面をつなぐスロープと解釈したい*。この突起があるためその両側に沿って雨水があつまって侵蝕谷ができやすくなったと考えられる。(阿子島私見)

(3) 後世の侵蝕変形

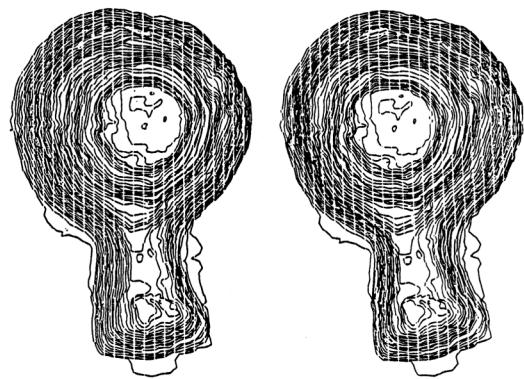
今回の検討によって、古墳の斜面は丘陵地の自然斜面と同様に微地形分類の手法が適用できることがわかった。古墳斜面の微地形分類ができれば、地形学にとっては原形のわかっている斜面の10³年地形変化速度をあきらかにすることができるし、考古学にとっては、侵蝕性の斜面(凹型斜面)と原面形態を継承する斜面(凸型斜面)とが予め識別されていれば、発掘調査のトレーニング設定や断面解釈に役立ち、かつ復原に際して表面に盛るべき土量の決定に役立つはずである。



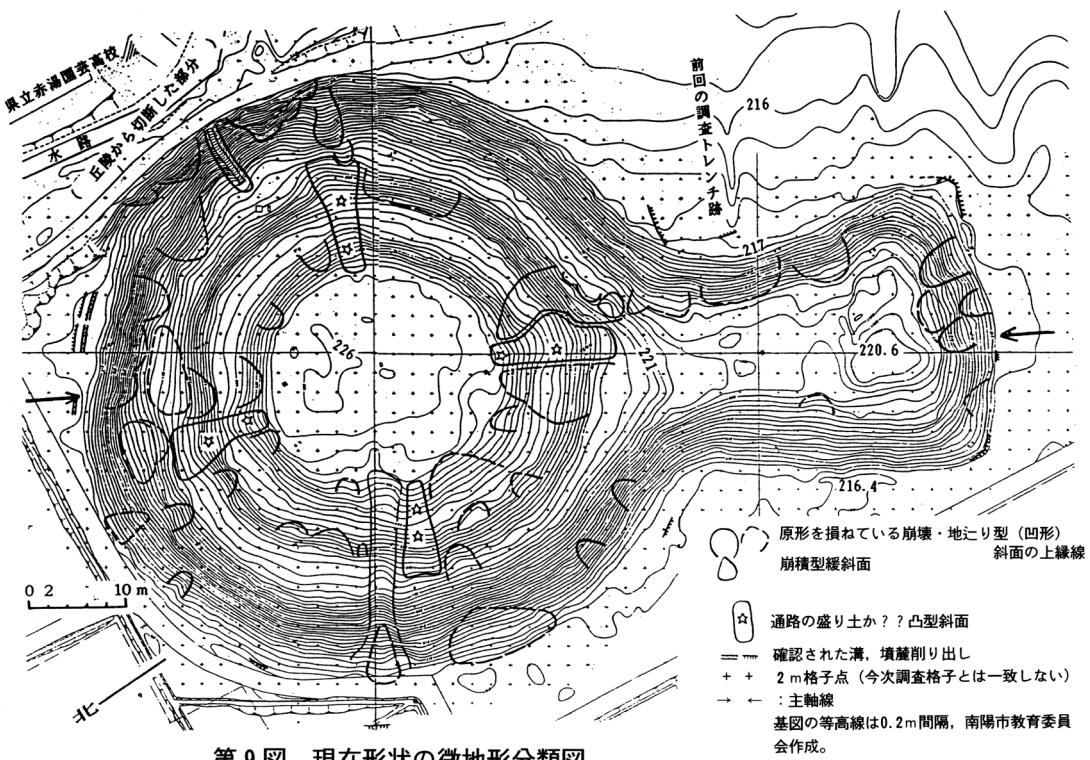
第6図 想定される原形の立体視図(等高線間隔0.5m)



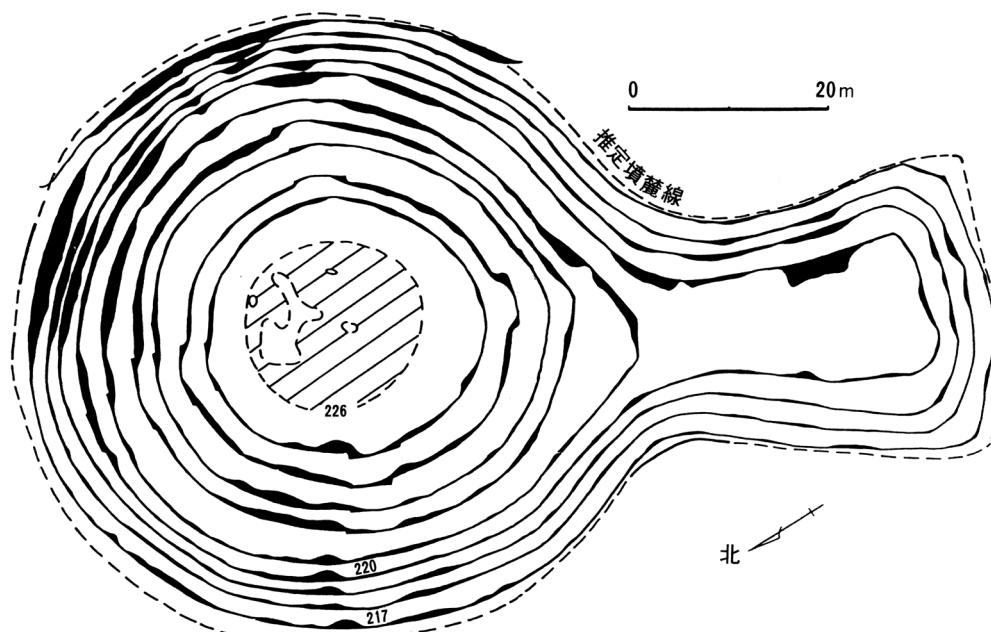
第7図 現在形状の立体視図(等高線間隔0.5m)



第8図 現在形状の立体視図(等高線間隔0.2m)



第9図 現在形状の微地形分類図



第10図 築成以降現在までに侵蝕された部分（塗りつぶし部分。1m間隔計曲線による）

【立体視図の作成と微地形分類図の作成】等高線間隔20cm, 縮尺1/200の実測図を1/2に縮小し、A3版デジタイザーで読み取って3次元でやや傾けて描いた2枚の等高線図（第8図）を立体視して、斜面分類を行った結果が第9図である。全景がみえることと過高感によって、現地観察よりも斜面分類のくくりがしやすい。50cm間隔等高線の場合（第7図）は平面図精度が同一であっても読み取りがしにくく、テラスの表現も不満足である。

微地形分類図には、とくに侵蝕型の凹形斜面と堆積型の凸形斜面を記入してある。残りが原形を継承している凸形斜面である。

【侵蝕量の計測】1/200図上、谷埋め法によって第10図のように原形を推定し（第6図はその縮小図、等高線間隔0.5m）、1m計曲線について現在形の等高線とのずれの面積（第10図の塗りつぶし部分）を1/200図で計測した。その結果は侵蝕土量が $818.8 \times 1 \text{ m}^3$ 、平面積（復旧217m線による。平均傾斜30°の表面積としても1.15倍）が 3661.0 m^2 であるので平均侵蝕深は0.22m、1600年間の平均削剝速度が0.14mm/年となる。この値は山形市菅沢2号墳（直径約50m、高さ約5mの円墳）の周濠の堆積土量から推定したもの（全表面の平均侵蝕深が約0.15m、墳頂をのぞく斜面の平均侵蝕深とすれば0.2m。阿子島1988）とほぼ等しいことがわかった。

（補注）稻荷森古墳の盛土・整形法および旧測量図による全容積の概算（15,500m³；うち盛土量概算7,440m³）は、加藤・佐藤（1982）が試みたことがある。

箱堀工法かとみたのは、丹羽茂氏のご指摘のように、堅穴住居の掘り込みと判明した。前回の整形法推定は一旦撤回する（加藤）。

文 献

- 阿子島 功 昭和62年（1987）山形市菅沢2号古墳の10³年侵蝕速度（演旨）。地形，9-1，p.63
(日本地形学連合1987年秋季大会)
- 阿子島 功 昭和63年（1988）古墳の侵蝕速度——考古学と私の地形学1。地理33-3, p.64-69
- 阿子島 功 昭和64年（1989）古墳斜面の微地形分類—斜面の10³年侵蝕速度をもとめるために。
日本地理学会予稿集35（1989年春季大会），p.230-231
- 加藤 稔・佐藤鎮雄 昭和57年（1982）最上川流域の前方後円（方）墳。『最上川』，山形県総合学術調査会，p.820-844

等高線のデジタイザー入力について山形大学医学部電算室鈴木重信氏にご教示いただきました。

2. 遺構と人為的改変

(1) 墳丘内の発掘調査

発掘調査は改変を目的としたものではもちろんないが、墳丘に手を加えたことではあるから、記録のため現墳丘内の調査面積等を次の表に記す。

調査年	調査者	墳丘にかかる調査地区	調査面積 (再調査は含まず)	備考
昭和36年 (1961) 6月	(山形大学) 柏倉 亮吉氏	試掘17か所	推定約17m ²	註9の文献から
昭和36年 (1961) 9月	(山形大学) 柏倉 亮吉氏	くびれ部西Bトレンチ、前方部端Cトレンチ 前方部墳頂部Eトレンチ	約39m ²	註11の文献から
昭和53年 (1978)	山形県立博物館	第3、第4各トレンチ	約31m ²	註14の文献から
昭和54年 (1979)	山形県立博物館	KW区、KE区、KZ区	約172m ²	註15の文献から
昭和62年 (1987)	南陽市教育委員会	A、B、C各トレンチ	約124m ²	註8の文献から
昭和63年 (1988)	南陽市教育委員会	E、F、G、H、I各区	約100m ²	今次調査
		合計	約483m ²	

表1 稲荷森古墳の墳丘における発掘調査

(2) 確認された遺構と改変部（附図2）

A 後円部

後円部墳頂部は、おおむね平坦な姿を示しているが、西部と南部方向にかけて傾斜し、しかも等高線がやや乱れている。Aトレンチにおける土壙等の遺構の存在が示すとおり、築造後様々な活動が行われたことは確かである。

墳頂部は、附図2のA-A'では直径約24m、Aトレンチでは、検出された北の肩から南の地表の肩部で約23.5m、そして比較的乱れのない墳頂東半の225.60mの等高線上（法線上）では約24mを測る。築造時の墳頂部が仮に正円に近い形であるとしたら、南西部では人為的または自然的な広範囲の改変や崩落が考えられる。

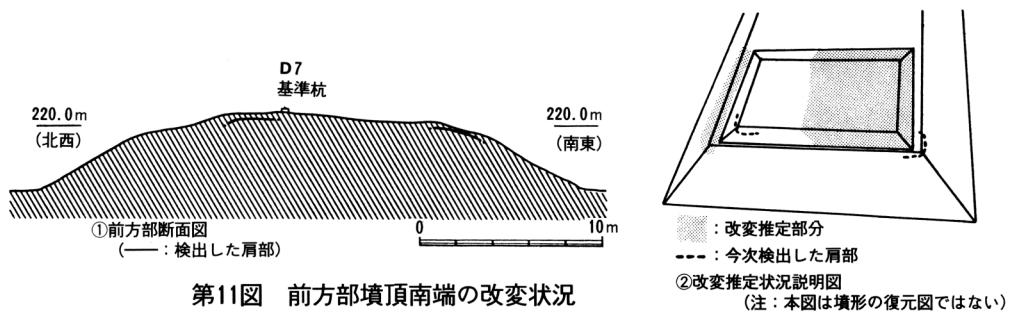
墳丘斜面では、第2トレンチ南東側からC-1区にかけてみられる凹部は、通路であり、また、墳丘東側では祠付近の平坦部（K区付近）および石段がみられる。これら成因が判別できるもの他、A・C両トレンチで検出された、土壙・溝・性格不明遺構が後世の改変としてあげられる。

墳麓部については、BトレンチやD区で検出された「地山段差」は、墳麓残存部であり、このことは、当該地区一帯は、最大幅約2.5m長さ20~25m程度広く削平を受けたことを示すものである。また第4トレンチおよびCトレンチの所見でも、墳麓に部分的改変が見られ、農道造成との係りが考えられる。同様に、E区の所見やE区周辺の墳丘部の等高線が示すとおり、この付近でも、農道や排水路等による改変が十分考えられる。上述以外の墳麓部は、未調査のため断定はできぬが、ほぼ築造時の状況を反映しているとみなされる。

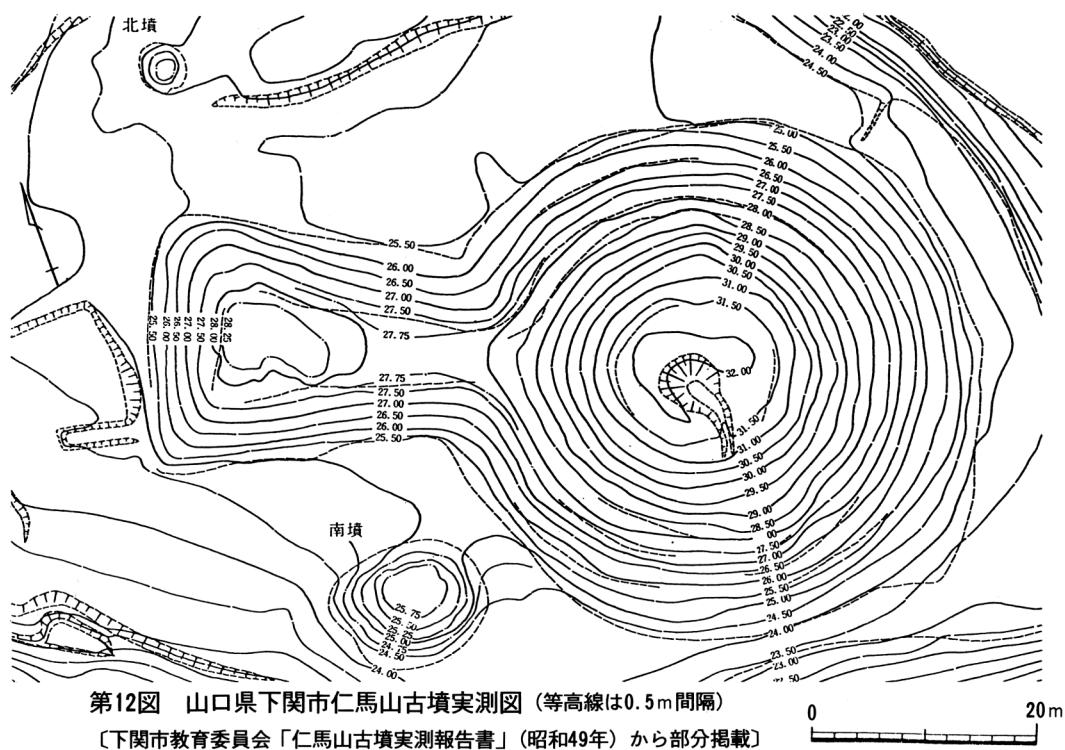
B 前方部・くびれ部

墳頂部北半は、従前調査KW, KE両区において、削平により平坦となったという所見はなく、元々現状のとおり平坦であったと考えられる。一方、墳頂部の南端部では起伏がみられ、F区の調査所見から、元々は墳頂部平坦面よりも一段高く壇状の盛り上がりがあり、その東半部は改変を受けていると想定される。F区中央部で検出された平坦面とコーナー部（肩部）は、残存した壇状のものの西のコーナーにあたり、F区東部で確認された肩部は、北方から続く墳頂平坦部のコーナーであって、対をなすべき西半のそれは、削平もしくは自然崩壊によりF区内では明確につかめないものと推定される（第11図）。

なお、本古墳と墳形（平面形状）が類似し、かつ前方部墳頂端部に一段壇状の高まりがみられる



第11図 前方部墳頂南端の改変状況



第12図 山口県下関市仁馬山古墳実測図（等高線は0.5m間隔）

〔下関市教育委員会「仁馬山古墳実測報告書」（昭和49年）から部分掲載〕

ひとつの例として、山口県下関市仁馬山古墳（全長74m三段築成）がある（第12図・註17）。

墳麓部は、D区のごとく明確な状態では確定されなかった。G区では、墳麓東側縁のコーナー部付近に部分的に確認されたが、G区内南端部における墳麓部の段落は、墳麓であると断定できないが、可能性は高い。G・H・I・J各区内では、後世の溝が墳麓をめぐることが判明し、かつ各溝の外側には墳丘残存部がみられることもあって、墳麓線は、これらの溝の範囲内に存在していたものといえる。

また、前方部のコーナー部については、東のG区において墳丘の一部にやや傾斜が緩い部分がみられ一定の改変は推測されるものの、東・西両コーナー部とも大きな改変はなかったと考えられる。

くびれ部では、KW・KE両区の調査所見のとおり、平安時代から中世ごろの土壙が散在し、部分的小規模の改変は認められるが、大規模の改変はないと思われる。

(3) 前方部周囲の遺構

くびれ部西と前方部南端一帯では、前述のとおり墳麓部をめぐる溝が確認されている。G区のSD15、H区のSD18、I区のSD16、J区のSD21は、溝の幅や断面形状の差異、覆土およびその堆積状況の差異はみられるが、各所見のとおり築造後の遺構である。おそらく、墳丘（かつては山林）と周辺地（かつては畑）の間に、墳丘からの雨水の調整用として、あるいは、地境用として設けたものと考えられ、各々の性格を一括してとらえることができよう。

G・I・H各区では、ほぼ北西から南東の方向に走る溝が検出された。溝の方向や覆土状況から、G区SD5・I区SD10・H区SD20、同じく各区のSD6・SD11・SD19は、それぞれ1条の溝の可能性が考えられる。

SD12は、幅が広くかつ深い溝であるが、周濠と認められる状況は検出されていない。なお、このSD12には、SD7やSD4とやや類似性がみられる。

G・H・I・J各区では、土壙やピットが確認されているが、全て後世の遺構とみなされる。

3. 出土遺物について（D区出土RP1を中心として）

RP1とした一括遺物は、前記したように、D区から出土したもので、「底部穿孔土師器壺形土器」と考えられる。その出土状況、層位などの検討から、RP1が稻荷森古墳の築造時期に密接なかかわりをもつ可能性があることが指摘できる。ここでは、これまでの調査所見をふまえて、この遺物が現段階でもつ問題の所在を整理し、明確にしておきたいと考える。

(1) 出土状況の検討と古墳とのかかわりについて

D区で検出されたSX1は、後円部墳麓線を画する性格のものと理解できる。前節で述べたとお

り、昭和62年度調査のBトレンチで検出された「地山の削り出しによる段落」と同一の性格を有するもので、一連の遺構として把握できる。土層断面の検討によても、後円部北東部の現況墳麓線は、何らかの後世の削平による所産であり、SX1は墳丘が削平を受けて残存した部分で、本来の墳麓線の状況を反映していると考えられる。

RP1は、このSX1の北側に隣接して確認されたSD3のさらに上位から一括して出土したが、調査区西壁面（附図3（1）のD-D'断面）の観察所見によれば、RP1の出土層位は第7層中位からSD3のF1層上面にかけてである。第7層はSX1の傾斜変換部（段差部）からSD3覆土F1上面に堆積しており、さらにこれを切ってSD1が存在する。一方、D区調査所見のとおり、SX1およびSD3では、第7層下位に堆積したそれぞれの土壤特性は極めて類似しており、堆積過程で両者に隔絶した時期差を認めることはできない。第7層は、明らかに両遺構の上面に連續して堆積しており、墳丘斜面からの流れ込みによる流土的性格をもつものと考えられる。第7層がSX1の上場で断絶し、現墳丘側の第2層下位に認められないことも、この付近が築造後の削平を受けたことを示していると考えられる。

以上のような検討をふまえれば、RP1は古墳築造後、SX1、SD3双方の覆土堆積過程の時間的範囲のなかでとらえられ、少なくとも古墳築造年代の下限を示す資料として把握することができる。

また、昭和53（1978）年調査時、第4トレンチの「盛土層直下」から「土師器高坏形土器」が1個体出土している（註18、第13図）。この高坏形土器の出土層位は、昭和62年度の再検討によれば、原丘陵に存在した「住居跡と考えられる掘り込み遺構」に帰属する可能性が極めて強いことが指摘された（註19）。

土層断面の観察によれば、第47層（旧表土）下位の第49層は縄文期の遺物を包含し、4トレンチ2区では第49層下第45層（地山層）下位に掘り込んだフラスコ状土壤などが検出された。「住居跡と考えられる掘り込み遺構」は、1区東壁南半部から南壁西半部にかけて認められ、明らかに第47層（旧表土層）と第49層を掘り込んでいる（第14図、附図8）。掘り込み遺構内には、貼り床と考えられる硬いしまった薄層（第46層）が存在する。第40層（明赤褐色土層、5YR5/8）より上位は確実に墳丘盛土層として把握できるが、その下位の第44層、54層については、盛土層としての確証を得ることが出来なかった。両者は巨視的には識別し得るが、その土層境界は漸移的で、極めて不明確であった。また、第44層は、貼り床と考えられる第46層直上より第40層との間に单一の土層として堆積しており※、しかも南壁面では住居跡の掘り込み線が第47層（旧表土層）より上層には及ばないことをも考えれば、当該遺構が完全に廃絶し、自然埋没した後に古墳築造が開始されたとするよりは、連続した時期に、第44、54の両層の堆積成因となるステップを経て（註20）、墳丘盛土が開始されたと考えることが可能である。少なくとも、稻荷森古墳の築造時期は、この高坏形土

器の帰属する時期よりは遡り得ない。従って、古墳築造時期は、これまでの調査で得られた両土師器を上限・下限とする限定された時期内に求めることができると考えられる。

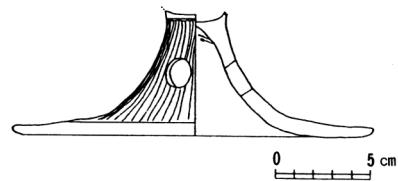
(※第44層には、黒土色・褐色土ブロックが混入し、自然堆積というより、埋土的様相が強い。)

(2) 出土土師器の特徴について

昭和53年度の調査で出土した土師器（第13図）は高壺形土器で、壺部は欠損しているが、脚部から裾部にいたる下半部の全様は把握できる。その特徴は、裾部径18.6cmを測り脚部の中位に3個の円窓を有し裾部が大きく広がることである。器壁はうすく、器面調整は丁重で表面にヘラミガキが施されている。脚天井部を貫通する中央孔は認められない。

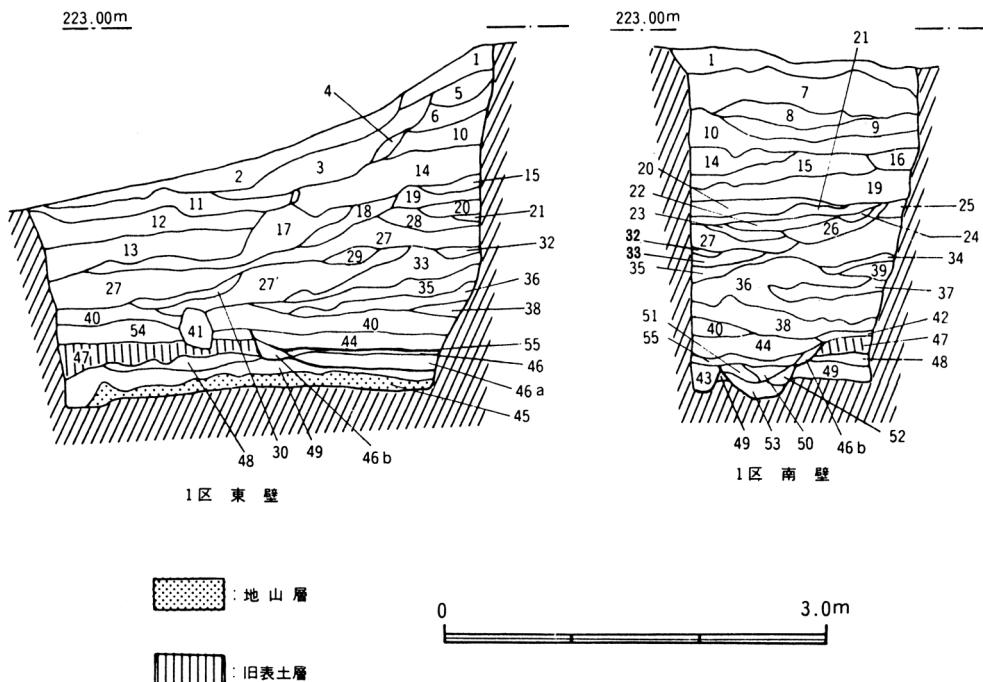
一方、R P 1は70個ほどの細片となって、約 0.8×1.3 m程度の範囲から集中して検出された（附図3（1）、第4図）。

風化が著しく表面が剝落しているものが大部分を占め、器面の調整技法については明確ではない。胎土や焼成状況、色調などから、現段階では同一個体の「焼成前底部穿孔壺形土器



第13図 昭和53年度調査 後円部
4トレンチ出土土器実測図

（山形県立博物館「稻荷森古墳昭和53年度調査概報」
昭和54年（1979）から）



第14図 昭和62年度後円部4-1区土層断面図

（註8の文献から）

(土師器)」と考えている。遺物自体がかなりもろく、摩滅しているため接合途上であり、器形の全体像は今のところ不明であるが、頸部から体部へいたる断面形状から判断して、胴中央部かやや上に最大径をもつ壺と推測している。また、二重口縁壺のような口縁部分が付加されていた可能性もあるが、出土遺物のなかに、それに該当するような破片は認められなかった。

肩部には三段の粘土紐隆帯に縦の刻みを施した文様帶がめぐる。各粘土紐は、幅1.1cm前後で隆帯にはさまれた凹部は横方向のナデが認められ平滑である。頸部はほぼ直立ぎみに立上がる。頸部からの立上がりは内面で約1.5cmと非常に短い。3では頸部に接合部が認められ、また、4の外面下位と5の内面上位の両接合面に斜位の細いハケ目があり、この部分で接合し、ハケ目は表面には現れない。6は体部破片で沈線状の文様(?)が観察され、断面形状はやや外反する。頸部破片では、器壁の厚さが7mm前後であるが、6は4mm程度で非常にうすい。7は底部破片である。底部縁辺はかなり肥大し厚いが、立上がり付近は急激にうすくなる。6は、体部下半部の底部からの立上がり付近に位置するものかもしれない。いずれにしても、RP1は底部穿孔であること、肩部にある文様帶の様相などに顕著な特徴を見出し得る。

(3) 帰属時期についての予察

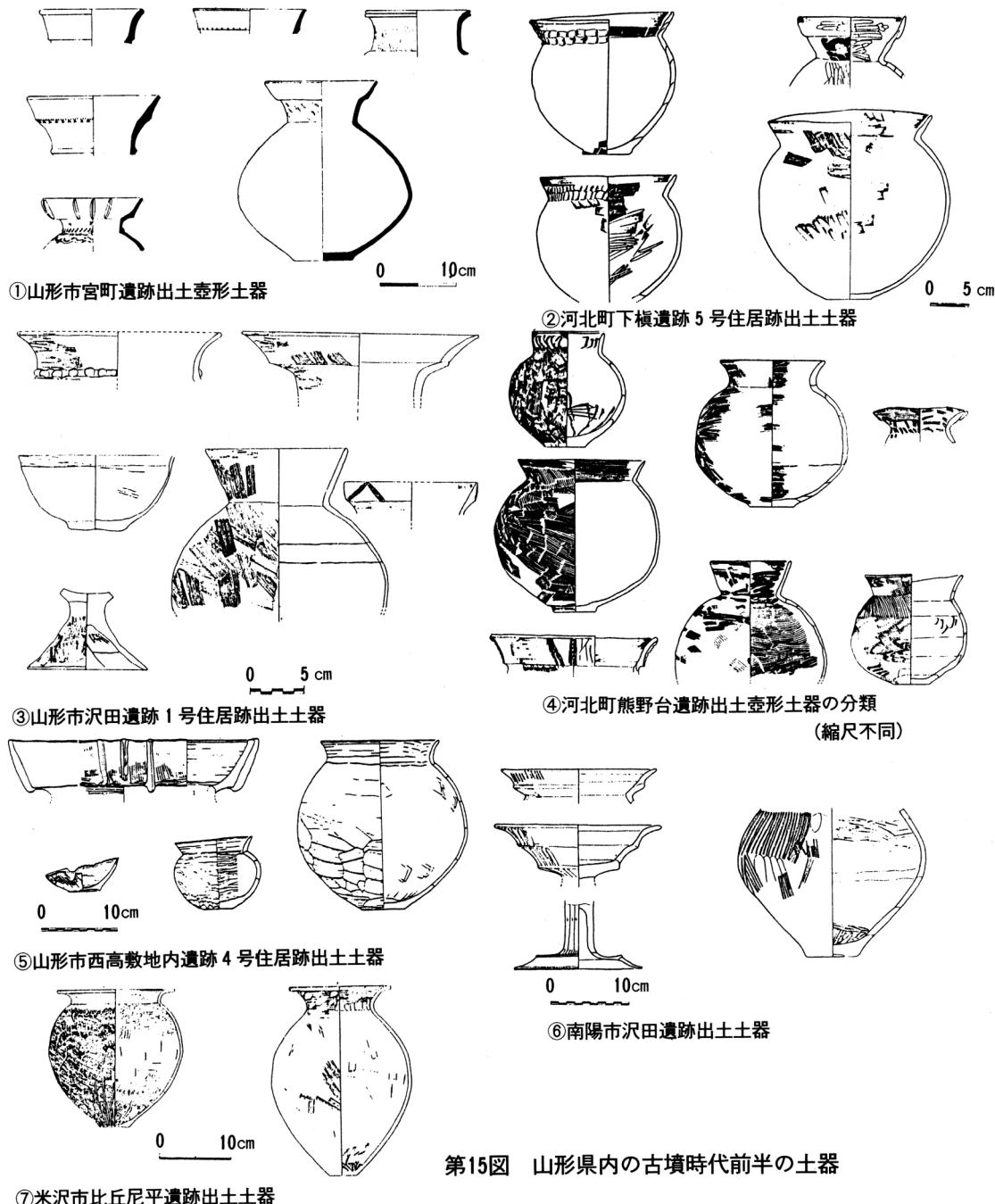
山形県内の土師器編年は、山形市嶋遺跡の調査を契機として、「山形盆地における土師器の編年」についての概要が提示された(註21)。それは、宮城県を中心とした氏家氏の7型式編年に準拠したものであった(註22)。そのなかで、氏家編年の「塩釜式土器」に並行するものとして、「宮町式土器」の提唱がなされている。宮町式土器は、山形市宮町の川原田、檜葉ノ木地内にまたがって、暗渠工事に際して出土した一括資料を標式とし、「弥生文化の末期から古墳文化の確立するまでの過渡的な時期のもの」という概念でとらえられている。器種としては、壺・高坏・器台などがあり、壺には二重口縁の棒状浮文をもつもの、頸部に突帶をめぐらし、刻みをもつもの、肩部にクシ目の波状文をもつものなどが認められる(第15図①)。しかし、遺構のなかで把握された発掘資料ではなく、資料的制約はまぬがれないのであった。

その後、氏家氏は浮文系土器の問題を含め、塩釜式土器がさらに細分され得るものであることを指摘されている(註23)。近年、山形県内でも調査例の増加に伴い、古墳時代前・中期にわたる資料の集積が行われており、川崎利夫氏によって、古式土師器の問題と土師器編年の試案についての提示がなされた(註24)。

また、米沢盆地では南陽市沢田、諏訪前、米沢市比丘尼平の各遺跡から古式土師器や古墳時代前半期の資料の報告があり、山形盆地でも集落跡の調査によって、遺構内での一括遺物に対しての検討が行われ、阿部明彦氏はそれらを前提にした再編成を試みている(註25)。宮城県でも、大橋遺跡の調査以後、集落跡の調査資料の集積によって、古墳時代前半期の一括資料について、より具体

的な検討と細分が可能となっており、丹羽 茂氏らを中心として精力的な取り組みがなされている（註26）。ここでは、稻荷森古墳出土の土師器について、前述したような前提をふまえながら、その様相について考えてみたい。

稻荷森古墳の4トレンチ1区出土の高環形土器については、昭和53年度の調査時に「所謂 塩釜式土器に並行するもの」と理解されている（註27）。基本的には現在でもその認識に変わりはない。



第15図 山形県内の古墳時代前半の土器

山形県内で、当該土器の如く裾部が大きく広がる高坏形土器の類例は現在のところ報告されていない。山形盆地の河北町熊野台遺跡の70号土壙から坏部が丸底を呈し無段の高坏が出土している（註28）。また、山形市沢田遺跡1号住居跡からも、二重口縁壺、頸部に隆帯をもつ壺などとともに無窓の高坏脚部が出土している（註29、第15図③）。これらはいずれも脚部から外反ぎみに裾部へ至る円錐形を呈するものである。それより後出する時期のものと考えられる山形市坊屋敷遺跡第70号住居跡（註30）では、脚接合部からほぼ直線的に広がる裾部をもつもの、河北町下槇遺跡（註31）では、脚部が円柱状を呈し裾部が外反ぎみの円錐形をなすものなどが認められる。

宮城県では、塩釜式土器について大きく三段階からなる変遷をとらえ、整理されている（註32）。それによれば、高坏では第I段階に裾部が大きく広がる形態のものが特徴的に認められると指摘されている。稻荷森古墳出土の高坏形土器の形態的特徴は、宮城県大橋遺跡第1号住居跡出土の一括資料のものと極めて類似する。また、円窓が比較的大きいこと（稻荷森古墳出土高坏では径約1.2cm）も、共通する要素と考えられることから、塩釜式第I段階とみなされる。

一方、RP1については、山形県内や近県では直接的に類例を比較検討し得る資料が把握されていないのが現状である。

山形県内の古墳時代前半を中心とする集落跡出土の壺形土器では、その特徴から数種の類型によりまとめることが可能である。それらを整理すると、つぎのとおりとなる。

- ① 頸部が直立し、口縁部中段に稜を形成し、大きく外反する二重口縁壺。山形県内では、山形市沢田1号住居跡（註33、第15図③）、高畠町地獄岩洞穴遺跡（註34）などから出土している。体部はいずれも欠損しているが、球形の胴部をもつ端正な形態を呈するものと思われる。
- ② 浮文系文様をもつ一群。山形市西高敷地内第4号住居跡（註35、第15図⑤）、河北町熊野台第39号住居跡（註36、第15図④）、山形市坊屋敷遺跡等から棒状浮文を付加した二重口縁壺が出土している。
- ③ 頸部に粘土紐隆帯をもち刻み目をつけた一群。山形市宮町遺跡、沢田1号住居跡出土例に認められる（第15図①、③）。隆帯は頸部のほかに、口縁部中段の屈曲部に伴うものもある。また、沢田遺跡1号住居跡出土例では、隆帶上を指頭で押圧し、連続した凹みを有するものなどがある。河北町下槇遺跡5号住居跡出土例（註37、第15図②）では、“くの字”状に外反する口縁部の頸部に逆方向2段にヘラの押引きが認められる（ただし時期的には後出）。
- ④ 頸部から外反しながら立上がり、口縁部に粘土帶を付加したり、折り返しによる肥厚部をもつ壺で、山形県内では比較的多く出土している。
- ⑤ 頸部から“くの字”状に屈曲し、口縁部中段に稜を形成し、口縁部がやや外反ぎみに立上がるもので、東根市扇田出土の壺（註38）、山形市谷柏出土例など、比較的多く認められる。
- ⑥ ほぼ直立する口縁部に“ハの字”状にクシ状工具による圧痕文を伴うもの。沢田遺跡1号住

居跡出土例（第15図③）。

⑦ 棒状付文、頸部に粘土紐隆帯を伴い、肩部に波状文を付加したもの。山形市宮町出土例（第15図①）。

⑧ 頸部に円形刺突文を伴うもの。米沢市比丘尼平出土例（註39、第15図⑦）。

⑨ 口縁部が単純に外反するもの。

以上のような9類に類型化することが出来る。①～③および⑥、⑦、⑧については、伴出した遺物などの検討も含め、塩釜式I段階、④については、塩釜式I段階からIII段階にかけて一連として認められるもの、⑤について南小泉II式前半期の段階まで継続して認められるものと考えている。⑨については塩釜式I段階から普遍的に認められる。

しかし、これらの類型のなかに、RP1に付加されたような要素を直接的に見出すことはできず、しかも当該期の土師器が比較的胎土を厳選し、器壁が薄く丁重な整形を行っているのに対し、RP1の胎土の状況や焼成状態などを考慮すると、在地の土師器とはかなり様相を異にしていると考えられる。

米沢市比丘尼平遺跡出土土器の円形刺突列点文は、関東地方を中心とする後期弥生式土器の円形浮文にその系譜を求めることが可能であり、壺全体のプロポーションや口縁部形態の様相は、外来的要素を指摘することができる。また、南陽市沢田遺跡ST5床面出土の、円柱状の脚部に裾部中央に稜を形成する高坏（当該報告書中のB4類）あるいはST6F1出土の口縁部中央で屈曲し稜を形成する壺（同C-2類）などのように、在地の土師器には認められない器形を含んでいるものがある（第15図⑥）。とくに、C-2類として分類している壺は、いわゆる“S字状口縁甕”との関連を考え得る（註40）。

RP1の「三段の隆帯上の横走する縦位列刻文」（第3章D区所見）という特徴的様相から、あえてその関連を求めれば、中国地方の「吉備」を中心とする貼り付け突帯をもつ弥生式土器などにその系譜の一端を推定することも可能ではあるが、今後の検討課題としておきたい。

出土土師器の性格として、上記のごとく集落跡出土とRP1は古墳出土という基本的な違いがあり、一様にはとらえられぬ点はある。RP1は墳丘に起因する堆積土層中に含まれており、底部穿孔が施されていることをも考えれば、古墳にかかわる儀器としての性格を持つものと思われる。その儀器としての性格から、特殊な文様構成やスタイルが伝世的要因として残り得ることは十分に考えられる（註41）。しかし、性格の違いはあるものの、何らかの文様的要素をもつことを基準として考えれば、大きく塩釜式並行の範疇ではとらえられ、少くとも丹羽茂氏のいう第III段階までは下らないのではないかと推測される。それは、一方では4トレンチ1区出土の高坏形土器の出土した土層断面の検討からも類推できる。

(4) まとめにかえて

以上、稻荷森古墳の出土土師器について検討してきたが、RP1については全体のプロポーションも把握しきれていないうえ、類例の比較、検討もまだ十分ではないが、あえて予察的意図を含めて、現段階での所見を述べた。

出土遺物の検討からすれば、古墳築造は4世紀代には確実に溯ると考えている。特にRP1は在地の土師器群では理解し得ないうえ、外来的要素を考えなければならないものである。その伝播と系譜の問題については今後の課題とし、継続して追求する必要がある。集落跡でも、南陽市沢田遺跡出土遺物のなかに、いわゆる「S字状口縁甕」と考えられるものが認められ、当該地域の土師器が成立する過程に、古墳成立の様相も含め、その系譜の問題が大きな課題となる。また、これまで述べたように、古墳の築造時期決定資料となり得る塩釜式第I段階の高環形土器（上限）とRP1（下限）の出土状況の検討や遺物が示す様相から推測すれば、高環形土器に連続した時期的な把握もでき、4世紀後葉段階まで溯る可能性があることを指摘しておきたい。

4. 稲荷森古墳の形状——とくに古墳の築造企画の推定——

南陽市長岡所在の稻荷森古墳は、古墳時代前期の前方後円墳でなかろうか。この疑いがもたれ始めたのは、氏家和典氏による宮城県名取市雷神山古墳の墳型分析結果（註42）に触発されてのことである。赤湯園芸高等学校の校地内で、南小泉Ⅱ式期の埴輪や石製模造品を得ていた秦昭繁氏は、この古墳の、後円径と前方部長の比が6：3となることを確かめ、東海林繁子氏のいう「前方後円形をなす古代遺跡」（註11）は、まさに本格的な前方後円墳であろうと想定した。一方、柏倉亮吉氏も、1961（昭和36）年次の調査が不十分なことから、山形県史編さん事業の一環としての再調査を企画された。1975（昭和52）年に実施した測量調査は、佐藤鎮雄氏、佐藤庄一氏はじめ地元研究者と、加藤が率いる山形大学学生と卒業生の手で進められた。その成果は、稻荷森古墳調査団の佐藤鎮雄氏が報告したところである（註13）。

200分の1測量図による墳型分析を試みた氏家和典氏と加藤は、次のような結論に達した。

——昭和52年、山形県史編さん室、南陽市教育委員会、南陽市稻荷森古墳調査団によって測量調査が行われた（原註22）。BC：CP：PDが6：1.5：1.5の銚子塚式の型であるが、〔宮城県色麻町〕念南寺古墳と反対に前方部両側墳麓の延長線のうち東側のものが後円部中心を通り、後円背後で交わるものである。しかも前方部前端の墳麓線は、この交点を中心とし、前方部前側墳麓延長線を半径として描いた弧上に重なる。前方部前端の幅は3単位であるから、6単位を原形としたものであろう（氏家 1978）。

——この古墳の後円部径に対する前方部幅の比は50%，計測点間の比は6：2：1。いわゆる銚子形式の古墳である。この計測点を求めるのに苦労した。前方部幅の垂直二等分線が後円径の

中心を通らない。つまり「ねじれ」た前方後円墳なのである。かえって、前方部左側縁線の延長上に後円径の中心がのる。両側の前方部側縁線の延長上の交点、すなわち結合点は後円径周縁上にある（原註4）。

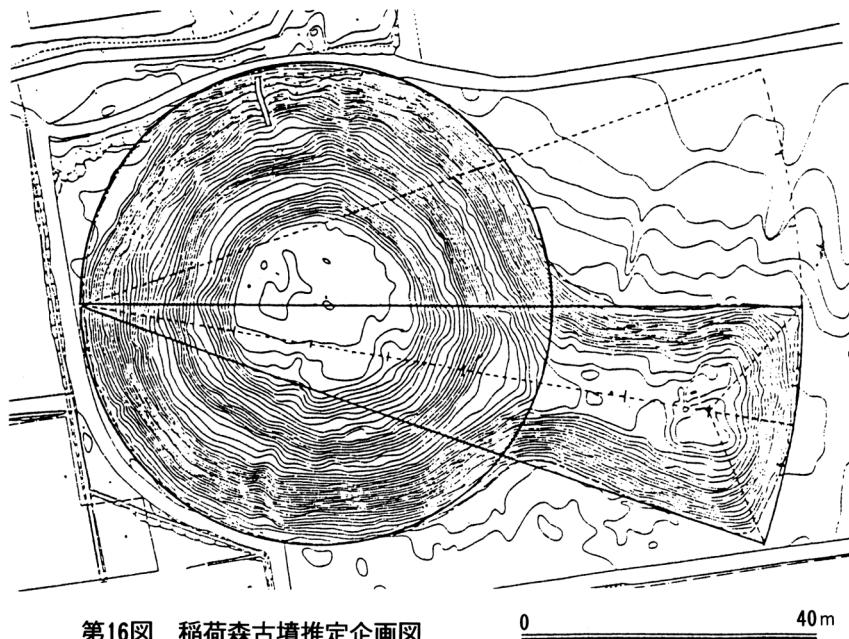
前方後円墳は左右対称が常態である。稻荷森古墳は前方部右半分が築造後に削平されたか、あるいは当初から造営されなかったかのいずれかである。種々検討を試みた結果、その部分は当初から築成されなかったものと判断された。稻荷森古墳は、本来あるべき姿の墳形についてその規模の縮小を余儀なくされたか、あるいは規定内の土量をもって造営するのに、前方部長をより長大にみせるために、片側の築成を省略したかである（加藤 1978）。

加藤は、このような形態の前方後円墳（宮城県名取大塚山古墳、同県念南寺古墳を含む。註42）に、「前方部半截型」の名称を与えた（註43）。氏家氏もその称呼を用いている（註44）。氏は宮城県内の「前方部半截型」の前方後円墳は、名取大塚山、念南寺古墳に加え、白石市瓶ヶ盛・仙台市長町裏町古墳をもその範疇に入れた。「前方部の巨大化は雷神山古墳で頂点に達し、以後の前方後円墳はすべて後円径を下まわっているが、東北地方では不可思議な現象の見られるものがある。その典型的なものは色麻町念南寺古墳、名取市名取大塚山古墳、山形県南陽市稻荷森古墳などで、前方部前端幅が後円径と同大もしくはそれ以上になるのを避けて、縦に半截した形をとるから、墳形はいびつになる。古墳規制の一種と考えるべきであろう。白石市瓶ヶ盛古墳、仙台市長町裏町古墳もこの可能性が強く、5世紀半ばから後半期にかけての現象のようである。」（註45）

1978, 79（昭和53, 54）年の山形県立博物館調査では、前方部前端と前方部両側縁に発掘溝を設けた。前方部東側の墳麓「3トレンチ」および「KE区」の調査で、現墳麓の東2~3mの距離にある「落ち込み線」の外へは、墳丘の盛土はなかったと判断された。つまり、稻荷森古墳の前方部半截は後世の改変でないと判断した。

今次調査では、前方部前端東南隅に、「G区」を設けた。ここで前方部の前縁線と東側側縁線の交点を探ろうとした。その結果は、「調査の概要」（11頁参照）のように、前縁線はほぼ確認された。東側側縁線の大部分は明確にしえなかったものの、その交点、つまり前方部の東南コーナーは把握されたものと解せる。その限りにおいて、前方部半截の確証を得た、と言い得る。したがって、稻荷森古墳についての氏家・加藤仮説はなお意味をもつと考えている。

山形県立博物館の「概報」（1980）に記された、後円部北1トレンチ、同西2トレンチ、くびれ部KW区、前方部前端ZS区、前方部東側縁3トレンチ、くびれ部KE区にみられた「落ち込み線」をもって、造営時の墳麓とする考案が一部にある（註46）。この結果は、古墳の全長100mの規模となるという。この数値はとらない。従前からの96m前後とみる。落ち込み線は、「調査の概要」のH区、I区、J区の説明のように、長岡山から連なっていた原丘陵の端部で、これを削り出して墳



第16図 稲荷森古墳推定企画図

0 40m

型を整えているのである。

後円部の原形について、阿子島 功氏は平面的に「四つの突起」の存在を推定した（19頁参照）。対向するそれぞれの二等分線が直交するとはいえないものの、後円部中心と前方部東側側縁線の延長を結んだ仮想主軸線の方向とほぼ一致する点は見逃せない。この点は種々解釈があろうが、南、北の二つの「スロープ」が、前方部半截型としての稲荷森古墳の仮想主軸線と深く関わると解しておきたい。

なお、別項のように、稲荷森古墳の造営年代は、墳丘盛土直下および墳麓出土の塩釜式並行土師器からして、4世紀代塩釜式期に落ち着くこととなった。氏家・加藤仮説の年代観は訂正を余儀なくされている。6：6型式とみた会津大塚山古墳を基準としたこの年代観は、会津大塚山古墳の再測量の結果からしても亦、改変を余儀なくされている。前方部半截型古墳の造営年代推定は、氏家氏による仙台市遠見塚古墳は4世紀末、名取市雷神山古墳は5世紀前葉という、1960年代の推論（註42）の上に構築されていた。これに関しては、遠見塚古墳および雷神山古墳の再調査で、その造営年代が繰り上げて考える段階に来ている（註47）。その補正は別の機会にしたい（註48）。200分の1新測量図（南陽市教育委員会 1985年作成）を利用した、前方部半截型としての稲荷森古墳の企画推定図（第16図）をつける。

(原註22) この古墳測量図の200分の1縮尺のものを、加藤 稔氏から頂き、同氏とともに検討する機会をえた。

(原註4) 稲荷森古墳の境形の解析、とくに計測点の確定にあたっては、氏家和典氏のご教示を得た。